

中国第二中幹線鉄塔建設  
区域内遺跡発掘調査報告書

# 足子谷横穴墓

1997年10月

島根県

広瀬町教育委員会

## 序 文

広瀬町は、縄文時代から中・近世にいたるまでの多くの遺跡を有し、歴史と文化財に恵まれた町であります。

なかでも、中世期の島根県を代表する山城遺構である「富田城跡」は、国指定史跡として著名であり、かねて本町においては、こうした先人の残した歴史遺産の保存と活用に意を用いて来ているところであります。

さて、この度発掘調査を実施した足子谷横穴墓は、中国電力（株）による鉄塔建設工事の中途に偶然発見されたもので、飯梨川上流域の古代を知る貴重な遺跡でした。しかし、事業の公共性もあり、調査後遺構は消滅の止むなきに至りました。

本書にまとめた調査成果は、その保存度の良さもあって多くの知見が得られて、当地方における横穴墓の研究と解明に大きく資するものであります。この成果とともに鉄器を中心とする出土品は、地域の歴史研究や社会教育に大いに活用されるものと期待しています。

最後になりましたが、今回の調査にあたっては島根県教育委員会、鳥取大学医学部第2解剖学教室、工事関係者、地元関係者等多くの方方のご指導・ご協力を頂きました。

関係各位に対し深甚なる謝意を表しつつ、ごあいさつといたします。

平成9年10月

広瀬町教育委員会

教育長 喜多川 忠

## 例 言

1. 本書は中国電力（株）が行った中国第2中幹線鉄塔建設工事中に発見された足子谷横穴墓の緊急発掘調査報告書である。この横穴墓は島根県能義郡広瀬町大字梶福留2135-9に所在し、調査は広瀬町教育委員会が中国電力（株）の委託を受けて実施した。

2. 調査体制は次のとおりである。

調査主体 広瀬町教育委員会 教育長 喜多川 忠

調査指導 島根県教育庁文化財課

調査担当 杉原 清一（島根県文化財保護指導委員）

調査員 藤原 友子（飯石郡三刀屋町）

作業員 青戸 延夫 藤原 由市

事務局 平井六四郎（広瀬町教育委員会教育次長）

竹中 哲（ 文化係長）

田中 秀子（ 生涯学習係長）

祖田 昇（ 主任主事）

調査期間 平成8年10月1日～10月8日（現地調査）

3. 出土人骨の鑑定は鳥取大学医学部第2解剖学教室井上貴央教授に依頼し、その成果は本書に収録した。

4. 出土鉄器のX線撮影は島根県埋蔵文化財センターにて行い、接着材等の観察は杉原が行い付編として収録した。

5. 図中の方位は真北を示す。

6. 遺物の整理・実測は隨時調査者が行い、編集・執筆も調査者が行った。

7. 調査にあたって次の方々から協力・援助を受けた。記して謝意を表する。

比田公民館 中国電力（株）島根支店 九建ヒメノ（株）

錦田 剛志（県文化財調査センター） 石井 悠（島根県文化財保護指導委員）



# 目 次

序 文	教育長 喜多川 忠
例 言	
I 調査に至る経緯と経過	2
II 位置と環境	2
III 遺 構	4
後道部 玄室部 埋葬状況	
IV 遺 物	10
土 器 装身具 鉄 器	
V ま と め	18
付編 I 広瀬町西比出・足子谷横穴墓から検出された人骨について	22
鳥取大学医学部第2解剖学教室 井上 貴央 影岡 優子 亀崎 豊実 上井 浩二	
付編 II 大刀柄抜・鎌茎巻・付着布片の検討	41

## 挿 図 目 次

図 1 横穴墓の分布	3	図 4 玄室の状況	4
2 地 形 図	5	5 遺 物 図(1)	11
3 横穴墓実測図	6	6 タ (2)	15

## 図 版 目 次

PL 1 遠景・玄室の状況	PL 4 遺 物 (土器・装身具)
2 発見時の状況	5 タ (鉄器)
3 被葬者と副葬品	6 タ (鉄器のX線写真)

## I 調査に至る経緯と経過

足子谷横穴墓は能義郡広瀬町西北田地区に所在し、中国電力（株）の行う送電鉄塔建設の工事中に発見された。

中国電力が計画した中国第2中幹線ルート鉄塔の予定地内について、平成6年6月広瀬町教育委員会は該地（計画No.327）を含む町内31か所について事前の踏査による文化財分布調査を行った。このNo.327地点では鉄穴流しとその導水路跡を認めたが、丘腹下方の横穴墓の存在は発見し得なかった。

平成8年9月21日工事中、地下で洞穴に遭遇し、内部には人骨もあるようとの連絡を受け、町教育委員会は直ちに現場に赴きこれを確認した。この間別途に地元比田中学校に勤務する石井悠氏によつても横穴墓であることを確認している。

工事を一時中止し、緊急に発掘調査を行い、改めて取扱いを協議することとし、発掘調査は杉原清一が担当することとなった。

発見時の状況は、玄室の一部が工事掘削で地表下約5mにおいて開口したもので、玄室内には崩落土が堆積していた。玄室の大部分や通道部・前庭部は工事掘削範囲外であり、また前庭と思われる谷間は多量の掘削土の溜場となっていることから、調査範囲は玄室内と通道部の可能な範囲に止めることとし、平成8年10月1日から着手した。

玄室内より8体の人骨と鉄器・土器などの副葬品を検出し、人骨は鳥取大学医学部第2解剖学教室井上貴央教授によって、10月7日現地において取り上げた。

この間、地元の比田中学校の生徒の見学や現地説明会も行なって、多数の人々が実見した。

取り上げた遺物は、その後隨時整理・検討・実測を行い、人骨については別途検討結果の報告を得た。

## II 位置と環境

足子谷横穴墓は能義郡広瀬町大字梶福留2135番地（山林）に所在し、大字西北田との境界にあたり、大きく西北田地区内である。

この地域は広瀬町の最南端の地区、飯梨川の最上流部にあたる。当該横穴墓は、この川沿いに小盆地をなす西北田中心部の北端にあたり、東西の山塊から張り出す尾根によって括れるあたりで、飯梨川の西側に張り出す尾根端南斜面に営まれていた。標高320.50m、

川からの比高は約50mであり、南方に西北田中心部あたりを望む立地である。

この地域一帯は風化花崗岩の真砂土地帶であり、付近の山腹は近世以降盛んに採掘されたかんな流しによって地形の変容が处处に見受けられる。

西北田地区は古代においては、仁多郡郡家がおかれた三處郷に属しており、その仁多郡仁多町亀嵩地区へは西へ低い峠越して続き、郡家比定地である郡地区までは約10kmである。南へは山塊を隔てて仁多郡横田郷（現横田町）であり、北へは狭隘な流れに沿って下り意宇郡飯梨郷（現広瀬町中心部）に至る。

西北田地区において古代の遺跡はほとんど知られていない。横穴墓で最も近いのは東方4.5km、東北田の松本横穴であり、西方は6kmの仁多町亀嵩・上分中山横穴墓群、北下流方向では6kmに中曾根横穴墓群があり、山を越えて南西7kmには横田町中心部付近の小池奥ほか多数の横穴墓群の集中区域がある。

広瀬町内では6か所の横穴墓又は群が知られているが、半数は町中心部及至は水系中下流域に分布しており、また古墳の大半もこれに準じている。同時期頃のその他の遺跡も同様に下流域において知られている。

西北田及び東北田地内には、その他の遺跡は製鉄関係と中世城跡が散在するが、古代に遡るもののは周知されていない。



図1. 横穴墓の分布

### III 遺構

この横穴墓は事前の踏査による地表からの観察では識別し得なかったが、鉄塔脚部基礎の掘削で地表下約5mの深さにおいて発見された。

発見位置は南へ張り出す狭い尾根端のわずかな高まりから南へ下る急斜面で、頂部からのレベル差は約10mである。玄室の主軸はほとんど正南を人口とするものであった。大量の掘削土はあたりの斜面に厚く積み置き柵で囲んであり、直径5mの掘削坑の底部に玄室の空洞が見られ、玄室内には工事による崩落土が堆積し、奥壁沿いあたりが旧状のように見られた。

このように工事による掘削破損は玄室の南西隅（玄門を入れると左手の隅）をかすめていたのであるが、玄室天井の剥落はあるものの旧状を保っていた。玄室内から羨道を見ると、羨門の閉塞はみられず前庭側からの流入土が充ちていた。玄室の状態は、奥部の左右隅近くにそれぞれ須恵器の一部と頭骨各2が見られ、玄門右隅には直刀が1口立てかけてあるのが見えた。

調査は破損部から玄室及び羨道部の崩落流入土を排出して行ったが、前庭部については工事堆土が多量に堆積していること、施工掘削が及ばないことなどから現況保存として発掘を及ぼさなかった。

また、地形は工事中につき大きく変容しているため、施工事前測図の提供を受け、この工事用地形図上に復元記入することとした。

#### 1. 羨道部

羨道部は玄室から80cmまでは確認したが、それより前方へは天井部が崩壊して流下崩落上で充満しているため確認していない。この範囲でみると幅は前方に狭く奥に拡がる65～85cmで、高さは約80cmを測るが、前方は剥落のため明確ではない。

流入堆積した土の中には石礫等は含まれていなく、閉塞の状況は不明ではあるが木板によるものかと思われた。

羨道の断面形は隅丸方形をなし、床面はこの範囲においてはほとんど勾配はなく、玄室床面より約3cm低い。

羨道奥端～玄門部の床面には幅50～40cm、深さ5～3cm掘り下げてラフな溝状が造られている。幾次のときかにこの位置で閉塞を行ったのであるのか或は玄室の排水のためにあるのか判断し難い。

羨道の堆積土の大部分は終葬後、前庭側から流入した粒子の細かい砂であるが、床面上

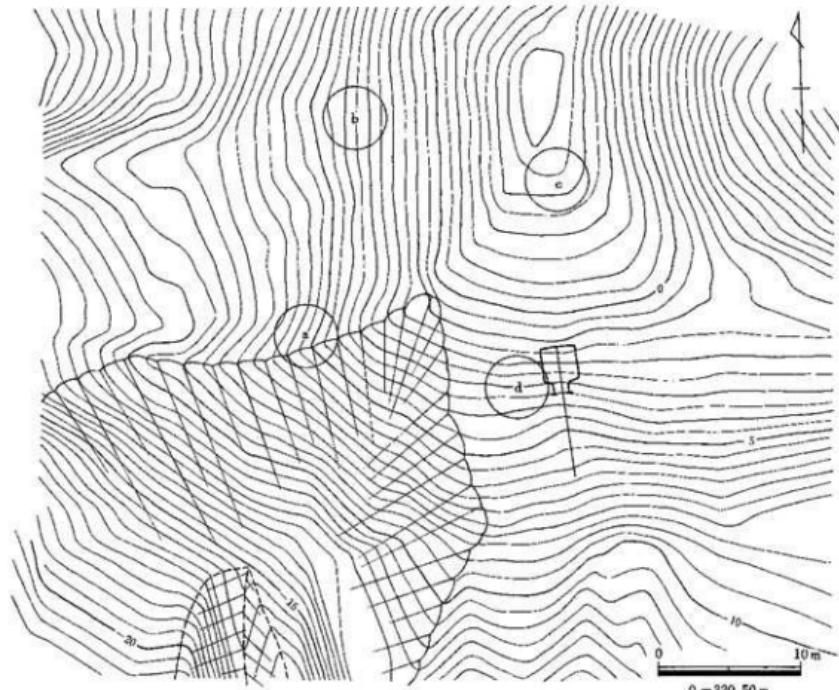
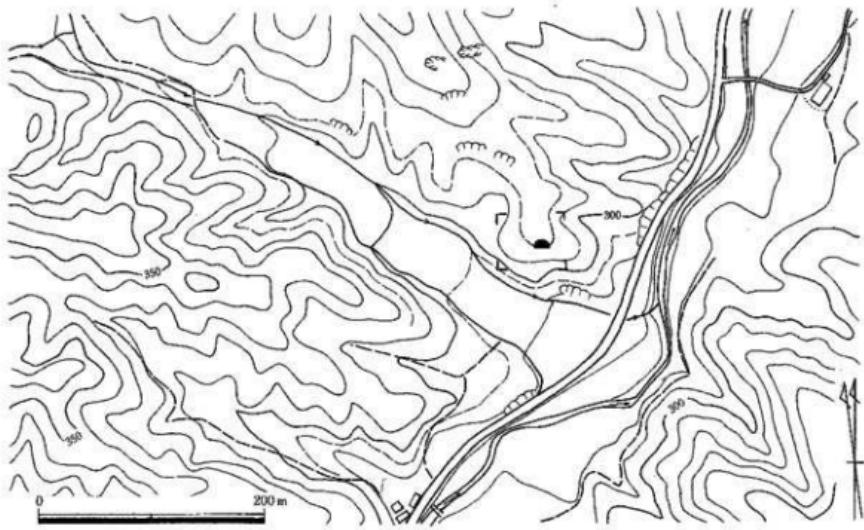


図2. 地形図

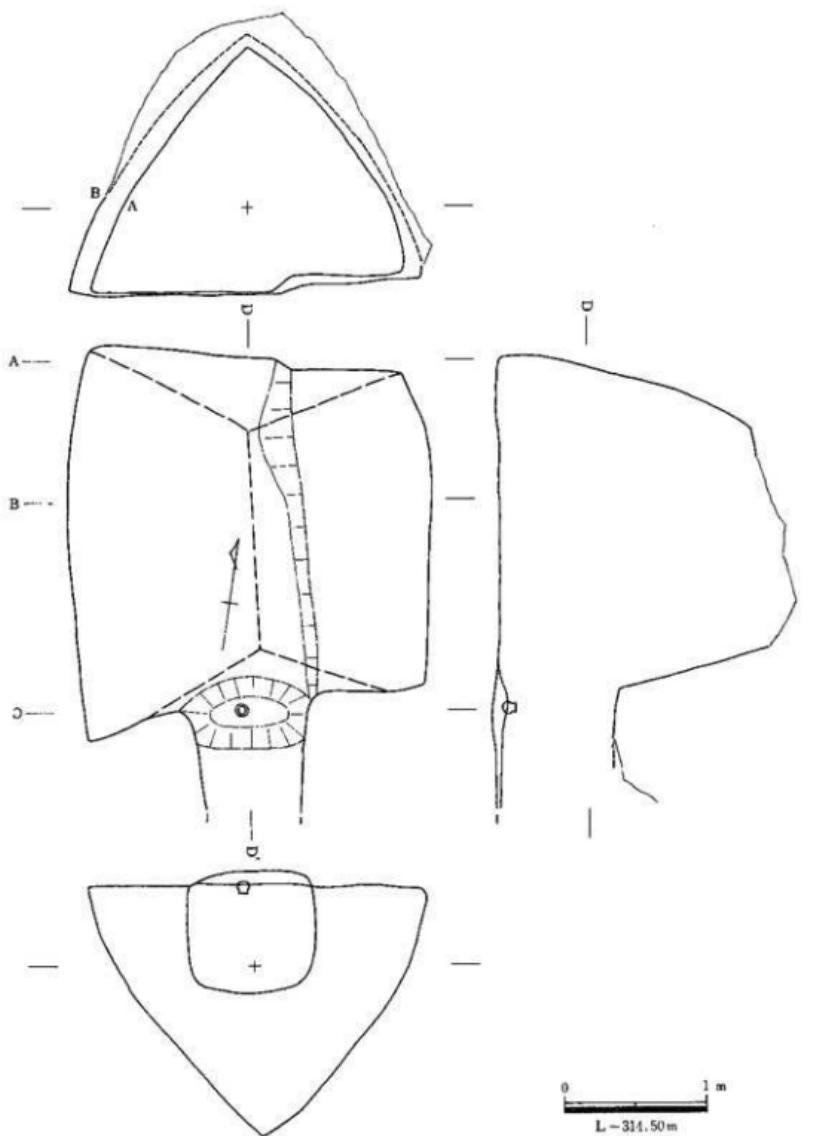


図3. 横穴墓実測図

3 cmほどは粗砂の多い土で敷土が行われ、踏圧されていた。

この踏圧面は玄門部でやや厚く盛り上げ、その中央に須恵器の壺1個が据えて置かれていた。これは最後の追葬時のものとみられる。

## 2. 玄室部

玄室は広く一帯と同じ風化花崗岩の地山に掘り込んで造られたもので、断面三角形をなす三角テント形で、妻入り両袖様式である。

奥壁及び前壁はいずれもやや大きく内傾して、四柱様式にも通ずる形であるが、棟線は一部残るもののか落している。

四壁面とも天井部と区別する界線はなく、床面はやや粗雑な削平面でやや胴張りの略長方形をなし、右手（東）側はわずか2～4 cmほど高く削り残して屍床としている。排水溝などは認められない。

棟までの高さは前壁部で1.90m、奥壁部で1.78mである。中央部分はか落しているが1.83mと推定した。床面は奥幅2.3m、前幅2.45m、中央部では2.58mを測り、奥行きは右壁部は2.25mであるが、左壁部は追葬時に入口側を再度拡張して2.80mとしている。玄室の中袖線上に羨道を造るもので、その方位はS7°00'Wで、ほとんど南に開口する。

## 3. 埋葬状況

床面は工事による崩落土を除くと自然堆積土はほとんどなく、床面風化した細粒質の砂土が変色していた。左右には人骨が重複して置かれ、その間には部分的な敷砂が行われたところもあった。

人骨は右側に3体、左側には集骨も含めて5体あり、中央には広く空間が置かれている。この被葬者を図のように、奥頭位右側から1号人・3号人とし、入口右側頭位を2号人とし、左奥壁際の集骨を4号人・5号人・6号人とし、左側壁沿いの7号人、左入口部の8号人とよぶことにした。

1号人は右奥隅に須恵器壺（No.21・22）を転用枕として、側壁に沿って伸展位で置かれたとみられるが、頭骨以外はその上へ薄く敷砂されたためか消失が著しかった。

2号人は大柄であり入口側を頭位とし、須恵器蓋壺（No.19・20）を転用枕に伸展位で置かれているが、頭骨と下肢骨の一部のはかはほとんど消失しており、暗色の陰翳として配置の判る程度である。右肩部にあたる玄室隅角部に大刀（No.1）が立てかけて、また右上腕部の下に刀子（No.1-2）が副えてあった。また頭の左側には直口壺（No.10）が置かれて、2号人の供獻とみられる。

3号人の頭骨は奥右側の中央寄りに1号人と並んでいたが、内側向きに転んでいた。しかし位置は大きく移動はしていない。そして1号人の体部以下に薄く敷砂を行ってその上に下半身が重なるように伸展位で置かれている。骨格の残存状況はやや良い。肋骨の位置に乱れがあるのは天井部からの剥落土によって動いたかと思われる。左膝上に鉄鎌(No.2)が置かれているが折れていた。また頭骨から30cmほど中央寄りに須恵高坏(No.11)があり、

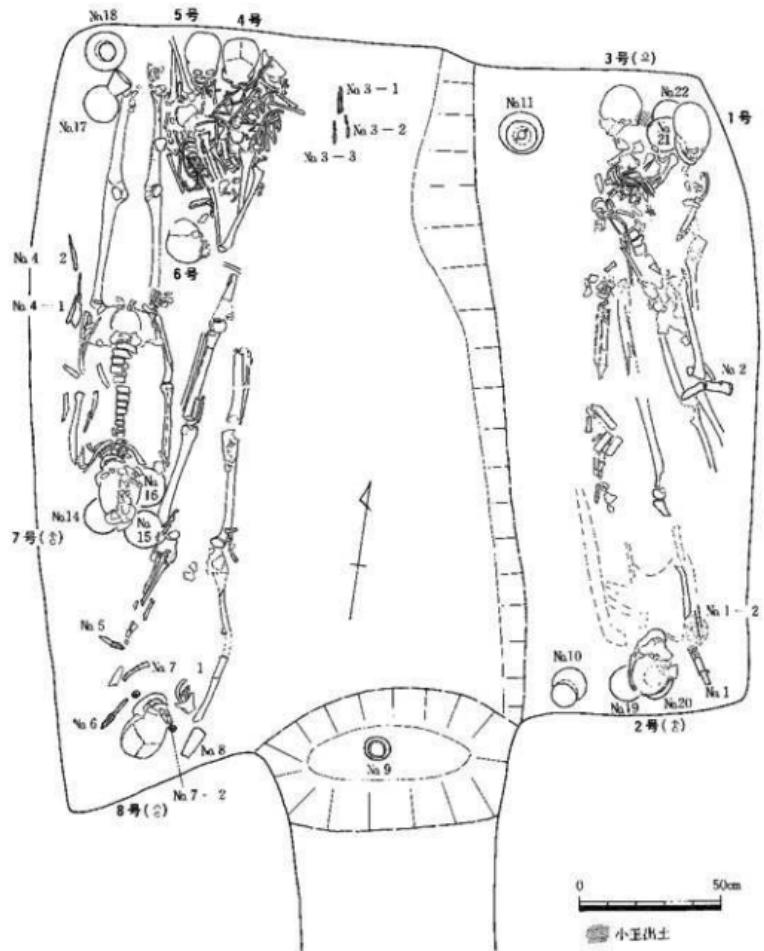


図4. 玄室の状況

3号人の供獻かとも思われる。また1号人頭骨位置との中間の床土中から小玉3顆を検出した。

このようにみると、右側屍床上の3人の埋葬順序は、1号人のうち3号人が追葬されているが、2号人の前後関係は明確でない。

4・5・6号人は左奥中央寄りに集骨してある。この3体の頭骨はやや小ぶりであるが特に6号人は明らかに小さい。また4号人と5号人の頭骨は奥壁に寄り掛かるように並べて置かれている。供伴する土器や鉄器等はなかった。

7号人は左側壁に沿って奥隅角部に足端を置き、頭骨は側壁中ばあたりに土器枕（No14・15・16）に伸展位で置かれている。骨体の保存程度も良く大柄の人である。頭骨は工事の落盤土で破損していた。供獻とみられる土器は左足端の上に一部重なって提瓶（No17）とその近くの玄室隅角に脚付壺（No18）があり、左手先と推定される側壁際には鉄鎌3本（No.4-1）と刀子1口（No14-2）があった。

8号人は大柄な体格であるためか玄門左手の隅を掘削拡張して頭位とし、左中央寄り奥の4～6号人集骨部を足端に伸展位で置かれている。四肢骨は比較的残っているが、体部はほとんど消失していた。頭骨の両脇位置に耳環（No.7-1・7-2）があり、頭位右側には鉄斧（No.8）、左側に刀子1口（No.9）が置かれ、さらに左上腕付近にも刀子1口（No.5）があった。また体位を延長した奥壁近くの中央付近に鉄鎌4本（No.3-1・-2・-3）があるが、8号人に對する獻納とみることも可能であろう。

8号人の左寛骨や左大腿骨・左手骨などは7号人の土器枕上に位置することから、7号人の後に8号人の埋葬が行われたことが判る。

このように左側の4～8号人についてみると、4～6号人が先葬で、これを集骨して7号人が、その後8号人が追葬されていたことになる。

## IV 遺 物

### 1. 土 器

出土した土器はすべて須恵器で、被葬者の枕に転用したものと供献したものがある。各遺物の番号は取上げ№で示す。(図5)

1号人は蓋坏1組(21・22)を枕としていた。

21は口径10.9cm、器径13.8cm、器高4.1cmの坏身で、立ち上りは強く短かく内傾し、体部と底部の界が不明な椭形をなす。器壁は厚手で、粗砂粒を稀に含み、内外面とも回転などで、底面も粗削りのち粗くなっている。外面はやや淡い灰色でわずかに青味がかるが、内面は赤褐色を呈し、蓋をしての焼成とみられ、焼締りはややあまい。

22は21と対をなすかとみられる蓋で口径12.0cm、器高3.7cm、口縁端は内湾氣味でやや薄く、厚い天井部との界線はやや不明瞭な細線2条が巡る。胎土は21と同じであるが内外面とも青灰色である。天井部も粗削りのち全面なでである。

2号人は枕とした蓋坏(19・20)と供献の壺(10)がある。

19は口径12.1cm、器高4.3cmやや薄造りの蓋で、口縁端は内湾氣味となる。天井部との界は明瞭でなく球形に近く、外面や天井部は削りのち全面なでである。胎土には稀に砂粒があり、青灰色を呈す。

20は口径10.7cm、器径13.2cm、高さ3.6cmの坏身で、立ち上りは短かく強く内傾する。体部と底部の界は不明で椭形をなし、器壁はやや薄い。外面～底面は削りのちなでで、伏焼きのためか底面を中心に灰被りの釉が付着している。

10は供献された壺で、口径9.3cm、胴径12.1cm、器高13.9cm、広く直立氣味の口縁部は高さ4.0cmである。底面は平底に削り放し、ロクロ整形で器壁は厚く、口縁端は尖る。胎土には細砂粒を含み、青灰色を呈し、肩～胴部に灰被りがみられる。

11は3号人に伴うかと思われる高坏である。口径15.3cm、器高10.2cm、脚端径10.4cmで、坏部は素直なカーブの浅い椭形で、口端は外方に尖り氣味にした薄造りであり、脚は太目で大きく踏んぱり、脚端は面とりを行って上方へ稜をなす。脚筒部には2方に三角形の透し孔を造る。器壁には線文等はなく全面を入念になでている。胎土はち密で灰白色を呈し、焼成は弱還元であり、坏内面には円形の白色化部分があり、重ね焼きを行ったことが判る。

7号には枕に転用した蓋坏(14～16)と供献した提瓶(17)がある。

14は口径12.6cm、器高4.5cmの蓋で、天井部との界はなく逆椭形をなし、口縁端は短かく折り返し氣味に内湾するもので、天井部は削りのちなでである。胎土には砂粒を含み、焼

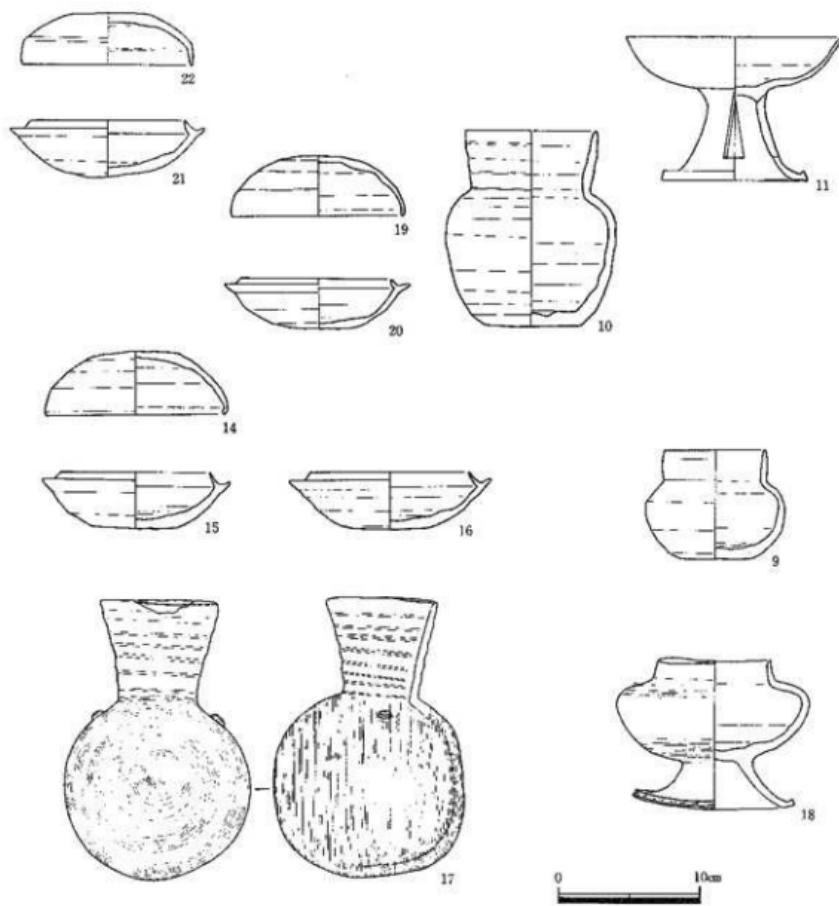


図5. 遺物図(1)

成は良く、灰～灰白色である。

15は口径10.6cm、受け部径13.4cm、器高4.0cm、16は口径11.3cm、受け部径14.4cm、器高4.1cmの壺身で、いずれも立ち上りは薄手で内傾している。15は厚手造りで底面はなではあるが粗面であり、16の底面はなでている。いずれも灰白色で焼成はやや良い。

17の提瓶は直径13.2cm、厚さ13.5cmの胴に、口径7.9～8.4cm、高さ6.9cmのやや歪な口縁部が付くもので、全器高は20.0cmである。把手は小円板状貼付けの退化した姿である。なお、口縁の一部が欠けているが、その破片はなく供獻時には既に欠けていたものとみられる。

18は脚付きの壺で、上記の提瓶と並んで玄室左奥隅に置かれていたもので、7号人に対する供獻かとも思われるが、集骨した4～6号人に関与する可能性も残る。器形は偏平な壺に短かく直立する口縁が付くもので、この壺に高环等に共通する踏んぱりの強い脚が付いている。但し蓋はなぜかなかった。口径8.0cm、胴径13.6cm、器高10.6cm、脚高3.6cm、脚径11.5cmである。口縁と脚端は焼成による歪みがあり、蓋を被って焼成したため肩部の灰被り部が円形輪郭を描いている。脚は11の高环に近い形で、端面を凹み気味の面とし反り上る。壺外面には回転する指頭なでがみられる。

9は玄門中央部の敷砂上に置かれた壺で、最終追葬時のものとみられる。口径7.1cm、胴径9.8cm、器高7.7cm、広くやや短かく直立する口縁は尖らせ、厚手で偏平気味の胴で、底面は粗く回転などの平底である。色調は他の須恵器と異なり黒褐色で底面は灰色であり、肩部には灰被りがみられる。

以上に述べた須恵器はその編年上では同一時期であり、蓋壺が小径化し高台付の出現前であることから、山陰Ⅳ期古段階、陶邑編年II-6（TK209併行期）とみられる。

## 2. 装身具

玉は3顆検出した。1号人・3号人の頭位の敷砂を篩選して検出したもので、敷砂砂粒よりやや小さい。石質は不明であるが軟質のもので灰～暗褐色を呈している。

サイズは次のようである。

玉1	直径7.00×6.25mm	厚さ5.70mm	孔径1.80×1.00mm
2	φ 5.50×5.00	4.30	1.10
3	φ 4.55	3.75	0.70

耳環は8号人の頭位に1対あり着装していたものとみられ、7-1が左7-2は右である。全面鏽で青白色であり、土は付着しているものの渡金又は銀片は見られなく、本来銅のままであったと思われる。

(左) 7-1	環径2.7cm	断面6.0×7.8mm
(右) -2	環径2.65	5.5×7.2

### 3. 鉄 器 (図6)

#### 1) 大 刀

大刀(1)は2号人に供献され、玄室隅角部に立てかけてあったものである。刀装も柄頭部が失われ、鞘の中ほどの木質部が腐朽しているのみで、保存状態は良い。現存全長57.2cm、柄は燃り紐巻きで頭部が失われて2.2cmの鍔があり、長さ9.1cmが現存する。鍔は厚さ5.5~6.0mmの喰出し鍔で、鞘部は鞘口金具から鞘尻金具まで45.3cmである。

柄部は苧様植物茎皮の継り紐で巻きあげた所謂“葛縫”(付編参照)である。柄の太さは鍔元ではやや太く3.3×1.6cmであるが、柄中では3.0×1.6cmであり、柄反りの姿である。

鍔は6mmの喰み出しで、4.5×2.8cmの長円形である。鍔は幅2.2cmの鉄板製、続いて幅断面蒲鉾形の鞘口金具に接する。

鞘の木材はヒノキ(付編参照)とみられ、その外面には稀に黒い薄い被膜様の物質が付着していることから、皮巻き漆塗りであったかと思われる。なお、鍔部には鞘木材が見られず皮巻きのみであったと思われる。

鞘尻金具は長さ4.9cm、袋状円筒形の鉄板製で断面3.2×1.7cm倒卵形で、平面は長方形をなす。尻面からの釘等は認められず嵌め込みのままである。このほか資金具や足金具などは消失したものと思われる。

このような刀装の状況は方頭の大刀の一般的な姿であることから、本例では欠失している柄は反りがあり方頭であったと推察され、奈良期の“黑作大刀”に近い姿のものと思われる。

この大刀のX線写真によって刀身を見ると、全長43.0cm、身幅は元で2.8cm鋒近くでは2.5cmで、約3.0mmの内反りがあり、平棟の平造りであろう。茎長は10.5cmで棟区は明瞭でなく漸移し、刃区は斜めに切っていてかなり強く反る。茎先は切で、目貫穴は先から1.7cmの柄巻きの下に被われていて、孔径約7mmで、鉄錆で止められているとみられる。

この大刀は直刀ながら茎は明らかに反り上るもので、やがて湾刀へと発展する兆しとみることもできよう。

#### 2) 刀 子

刀子は4口出土した。X線写真を援用した各法量は次のようである。

No	現全長	刀部長	茎長	鞘口金具幅	(被供献者)
1-2	9.3cm	4.8cm	(4.4)cm欠	1.0cm	2号人
4-2	12.5	6.5	6.0	0.8	7号人
5	9.6	5.4	3.2	1.3	8号人
6	14.6	8.0	6.6	1.4	タ

1-2は細身であるが茎幅は広く茎先は欠失している。区は明瞭でなく、棟は直線であるが平造りの刃部は柄元で強く内湾している。これは研磨使用の結果研ぎ減らしたものとみられる。柄には木質が残っており、断面 $1.5 \times 1.3$ cm長円形であり、柄口金具は鉄製である。刃先付近には樹皮と思われる被膜が付着しており鞘材とみられる。

4-2は平造りの刃部が直線的に細くなるふくらの枯れた姿のもので、棟区はなく刃区は斜め落として、茎先は劍先形をなす。柄口金具は鉄で、 $1.9 \times 1.2$ cm長円形をなし、刃部から柄元部へかけて樹皮状の鞘材が付着している。

5はふくらの付く平造りの刃部で、棟区・刃区とも明確で、柄は木質が残っており、柄口金具は鉄で $1.8 \times 1.5$ cm長円形である。棟部から刃先へかけて三枚重ねた樹皮と思われる鞘材が付着している。

6は最も大きいものである。平造りで鋒はややふくらの枯れた姿で、柄元近い部分は若干研ぎ減りしている。棟区・刃区とも不明瞭で、茎幅は広く茎先は劍先形である。着柄は元部が良く残っており、握りは素木のままであることが判る。柄口金具は $1.9 \times 1.5$ cm長円形で握り部と同じである。樹皮状の鞘材は3枚重ねとみられ、鋒付近と柄口金具付近に付着している。

以上のように4口の刀子はすべて樹皮を重ねた袋状の呑口の鞘に納められていたとみられ、また一般に刀子は日常の小刀として使用され、その結果研磨消耗による瘦身となったものがあることが判った。

### 3) 鉄 錐

鉄錐は合計7点が出土した。X線写真を援用してその形状と法量を概観すると表のようである。

これを錐身の形状によって大きく3種に区分する。

- 1) 鋒が五角形をなす細身の一群は、実用度が高いとみられる3-1(A・B)・3-2・3-3である。鋒断面が厚さ2.5mmの薄い平凸形の両刃で、麓被部は厚さ2.5~3.5mm、幅約7mm、断面長方形をなして両下端がやや広くなつて棘状をなし、続く茎は角錐状に尖

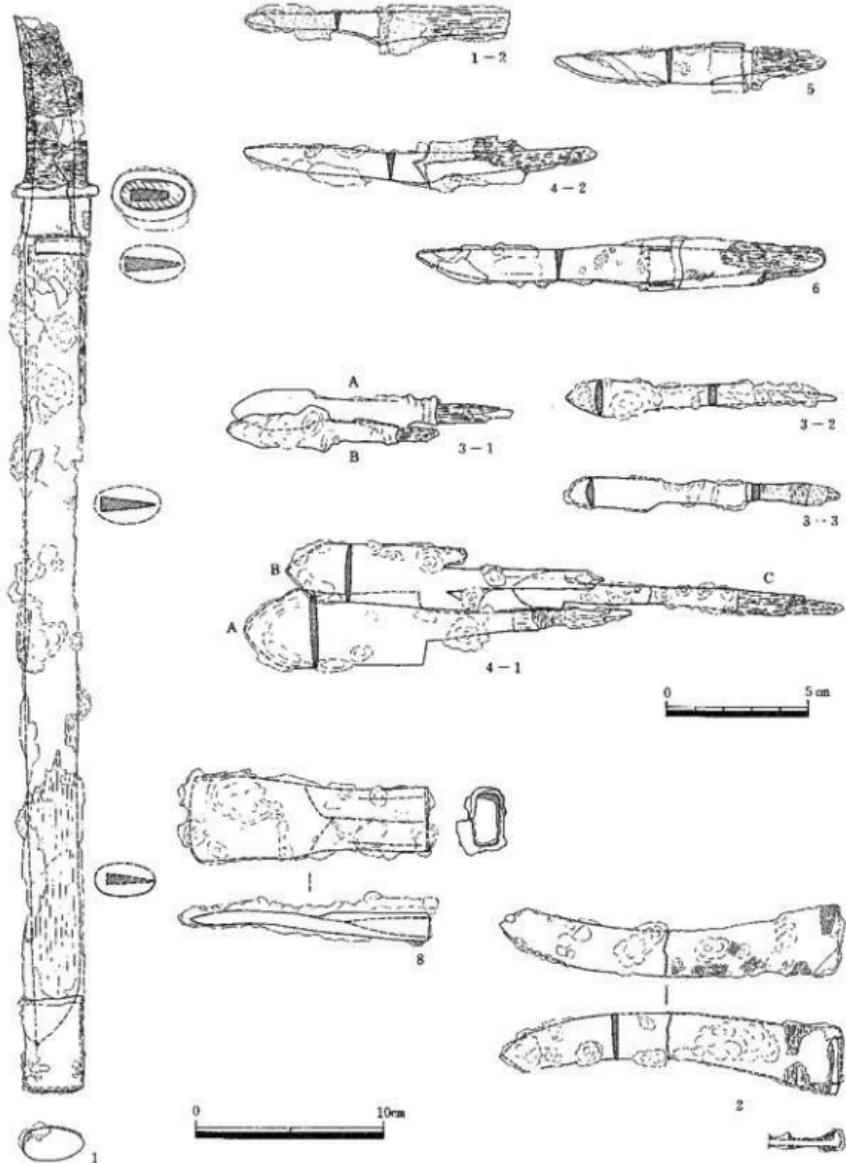


图6. 遗物図(2)

No	全長	鋒			籠被長	葉長	(被供献者)
		形	長	幅			
3-1 (A)	10.1 cm (B)	五角形	2.9cm	1.4cm	3.6cm	3.6cm	?
		タ					?
3-2	9.6	タ	3.1	1.3	3.4	3.0	?
3-3	(9.6)折	タ	3.3	1.1	3.1	3.4	?
4-1 (A)	13.3	大五角形	6.4	2.2	2.3	5.0	7号人
	(B)	11.3	大五角形脇挟	6.5	2.2	2.2	タ
	(C)	11.8	三角形	1.9	1.4	6.1	タ

る。但し 3-3 は鋒形がかたよっている。

着柄部をみると、3-1 は直径 8.5cm の茎巻き基部が残っており、3-2 は鏽で明瞭でないが、3-3 はほぼ茎長の間は直径 8mm の巻き状況が良好に残っていて、その素材と手法が判明するものであった。この観察（付編参照）によると、矢柄は竹で、着柄部となる先端を割り開き、外径を整えて肉を削り、撓りのない細糸（苧か？）で三重に強く巻き締め、さらに樹脂を塗って樹皮（桿皮か）で巻き上げ、直径 8mm の矢柄に整合させている。

他の鐵についても同様と思われる。

2) 4-1 A 及び B は五角形の鋒部が誇大化したものである。鋒は厚さ 2mm 弱の薄鉄板状で、B には脇挟りがある。またこの 2 点は断面長方形の籠被部は上方が広く基端では矢柄の径に近い幅まで狭くなり、下端の棘状突起も造られていない。

茎部は矢柄の装着状況も保存度が良く、矢柄端やその上に巻いた樹皮状の巻き付けも鏽で固着している。矢柄は竹で直径 7.5~8.0mm を測る。

3) 4-1 C は上記 AB と共に置かれ、鏽で 3 本が固着したものの 1 本であり、鋒がふくらみのある小さい三角形をなし、籠被部の長いものである。鋒の厚さは 3mm 弱で、稜はなく両刃である。籠被部は 6.1cm と最も長く、幅は中ほどでは 1.5mm 細く 5.5mm であるが漸次広くなって基端で最も広く 9mm を測る。断面は厚さ約 3mm で長方形である。

基部には着柄部が残っており、上記と同様直径 8.5mm の矢柄であることが判る。

以上の各鐵についてみると、いずれも籠被部下端の幅と同じか若干細目の矢柄が付けられていることが判る。

また、4-1 A~C の 3 本は置かれたままの位置で鏽によって相互固着しており。その鋒先位置は矢の全長の差を示しているとみられ、幅広の鋒の A・B は細身の C より 8~9.5cm 長かったことを示唆していて、細身の尖根様式に対し大形鋒の平根様式のものはより誇示性が大きいものと思われる。

#### 4) 鉄 芒

長さ12.5cm、刃幅4.6cm、基部幅3.5cm長方形の鍛造品で、刃端は緩やかな弧状であるが左右端のカーブが若干異なることから、柄は刃に平行に着けられており、縦方向の切り又は割りの片手使用に用いたものとみられる。刃端から2cmの位置で厚さ6.5mmで、最も厚いのはほぼ中央に近い位置で7.0mmであり、折り返し袋部の端では厚さ3mmである。

着柄部は折り返して合せた袋部のもので、袋の内法2.6×1.3cm長方形で、深さ約4cmの楔状とみられる。

また、袋部の折返し鍛着部を外れるあたりから縦断面に反りをもたせ、刃部からの中心線が袋部中央になるようにしている。

なお、X線写真によると刃部近くに刃の方向へ延びるかすかな条痕が5～6条見られる。これは鍛造の時、刃部へ鍛え延した方向を示すもので、鉄素材に含有した不純物又は純度の不齊に起因する陰影かと思われる。

#### 5) 鉄 錐

この鉄錐は3号人の左膝上に置かれていたものである。現存全長18.0cm、刃先が折損している。現存の刃渡り13.5cmで本来は15cmほどであったと思われる。形態は曲り刃で、緩やかな円弧を描く。身幅は刃元で2.9cm、現刃先で1.8cmを測る。棟幅は刃元が3.0mm、刃先付近で2.5mmの薄造りであり、重量は59gである。これは現行の草刈り錐に近い形である。

着柄部は高さ4mmほど上方へL字形に折り曲げたもので、幅2.3cmの木柄の痕跡が表裏に残っており、これによって着柄は割り木で挟む様式で、刃に対してほぼ直角であることが判る。

木痕の年輪幅は平均1.0mmで杠目の通ったものであり、例えば杉の心材のような材質が想像される。なお、この木柄は消失しており柄長は不明である。

この鉄錐は下肢上に置かれていたため、刃裏面に遺体の着衣が鏽によって固着していた。この布片は外面が鏽化物で固定されているが、糸素材は溶脱して空洞化しているので正確には形がネガティブとして残っているというべきであろう。これについて観察した結果（付編参照）1cm当たり縫8本縦7.5本の平織りで、素材はその断面形状から苧と判定した。

## V ま と め

工事中発見されたこの足子谷横穴墓は、後背稜上にマウンド状の高まり地形のある南向き斜面に造られたもので、玄室は三角テント形妻入りの様式である。前庭部は調査できなかった。この様式は奥出雲地域に通有のもので、この比田地区は古代において仁多郡三尾郷に属していたことも横穴墓形態に関与していると思われる。

狭道の閉塞は入口部より崩落土が流入しており不明であるが、追葬に伴う敷砂が観察された。

被葬者は8人で、向って右側にはわずかな段差で造り出した屍床上に1~3号人、中央部分をあけて左側に4~8号人が葬られていた。これらの人骨の保存状況は比較的良好く、依頼して別途鑑別・検討された。上器枕や供献土器・鉄器類・耳環・小玉も検出した。

以下二三の事項について若干の考察も加えてまとめとする。

被葬者について人骨鑑定報告と発掘所見を総合すると次のようである。

**埋葬順序：**右側については、1号人又は2号人のち3号人、左側については4・5号人のち6号人、これらを集骨して7号人、そして8号人。

**被葬者について：**表にまとめると次のようである。

被葬者	推定年令	性別	身長(推定) ピアンソン法による	伸展裝 頭位	土器枕	周 装 品		
						土 器	鐵 器	裝身具
1号人	10歳前後	不明		奥側	有			
2号人	熟年後期	男	163cm	入口側	々	壺1	大刀1・刀子1	
3号人	熟年後期~老年	女	148cm	奥側 (集骨)	無	高环1	鎌1	小玉3
4号人	13歳	不明		(々)				
5号人	10歳	々		(々)				
6号人	9歳	々		(々)				
7号人	壯年	男	165cm	入口側	有	提瓶1・脚付壺1	鐵3・刀子1	
8号人	壯年	々	160~162cm	々	無	壺1	斧1・刀子2	耳環1対

(他に鎌3あり 7号人のものと推定)

このように小兒(性別不明)4人と成人男性3人、成人女性1人、合計8人が構成員であり、このうち2号人(男)は特に大刀を有し、3号人(女)は小玉を着け鎌を持ち、いずれも右側に造り付けの屍床上に安置されていることから、これを主人として営まれた横穴墓であり、これと頭位を並べた1号人(小兒)は最も近い関係者であり、この三人は夫婦とその子供とみることができよう。

これに対し左側に置かれた4～8号人はそれに次ぐ関係の人々であったと思われるが、集骨された4～6号（小児）を除くと、7号人（男）は鉄鎧のみが供獻されて武人を思わせ、8号人は一種の權威とみられる耳環を装着して斧や刀子2口を持つ人であって、ともに立場が推察され、それも血縁関係者であることが思われる。

また、年令の面から右側2・3号人は當時としてはかなりの年配であるのに対し、左側の7・8号人は若く、集骨部は子供ばかりである点も指摘された。

**集骨について：**4～6号人集骨部に近い中央奥の通路部分に、7号人に対する供獻とみられる長茎鎧が置かれていることから7号人埋葬のスペースをつくるために4～6号人骨は集骨されたものと推察される。4・5号人の大腿骨は南を近位としてほぼ元位置とみられるのに、頸骨は北壁寄り即ち脛部以下の部位にあたると思われる位置に2体並べてあり、その前に肋骨等をまとめて重ねている。また6号人は頭骨が集骨部南端にあり、椎骨・寛骨と続き、大腿骨遠端は北壁面に接していて、脛骨はこれらの下に敷かれていた。

この状況から集骨の方法は4・5号人は本来南頭位であったものを、その上半身部分の白骨を足端付近に集めて置き、6号人は白骨化していない遺体の大腿部以上を引きずつて北へ寄せたものと鑑定された。そして4・5号人より6号人があとで葬られたものであることも指摘された。

また各号人とも下顎が上顎と咬合状態に近い位置にあることは不自然で、白骨化後再び整えたのではないかとの指摘もあったが、これを証する何らもなかった。

**土器について：**土器はすべて須恵器である。器種では蓋杯が最も多いうえこれはすべて転用枕で、初葬とみられる1・2号人と終葬に近いとみられる7号人に用いられている。これらはすべて小型化したもので、蓋と杯が上下逆転する直前段階で山本編年作のⅢ期にあたり、TK209型式のうちに包括される。また提瓶は把手がボタン状駆付に、高杯脚部の透しも刻線化する直前の一段三角形であるなど、その他の土器もすべてこの型式に括される。従って各土器の型式での時間差は認め難いといえる。

**小玉について：**3号人の頭位から検出した小玉3個は径も造りも粗雑である。灰～暗褐色軟質の石質であるが鑑定を得ていない。

**大刀について：**刀装の比較的良く保存されたもので、やや短い直刀である。X線によって刀身はやや内反りと判明した。特に注目すべきは茎部で、のちの日本刀での振袖形に似た強い反りがあり、同時代のものには管見の限り類例を知らない。鴻刀（日本刀）への移行を暗に示しているとも思われる。

刀装については柄頭を欠くが、黒作大刀に近い姿の方頭の大刀とみられる。喰み出し

鈍に鉗を付け、柄部は柄材（木）に落し込んで鉛止めとし、その上を苧皮状植物の撚り状紙で葛縄（繁巻き）に巻き上げてある。

鞘はヒノキと思われる材の合せ造りで樹脂塗りと思われ、鞘尻金具は袋状方形の嵌め込みである。

この大刀については特に茎形や柄巻きなどについての新知見が得られた。

鉢について：合計7本の鉢が供試されていたが、2本は薄鉄板状大型の平根様式であり、共に置かれた尖根様式のものより矢の全長が8~9.5cm長かったものと推定され、これは実用ではなく葬祭用と思われた。

また、尖根様式の鉢1本についてその着柄状況が判明した。矢柄材は竹で直径8mm程度、先端を割って茎に挿し、撚りのない帶状繊維束によって三重に巻き上げ、その上に樹脂を塗って桿皮を巻き、矢柄と同じ太さに仕上げていた。他の鉢についても同様とみられ、矢柄装着の具体的手法が判明した。この手法は岡田山1号墳の場合と近似しているが全く同一の手法とはいえないようだ。

刀子について：中~小型品で合計4口を検出した。内1口は延減りで刃が強く湾入するものであり、常用のナイフとして使用されていたことを示唆している。刀姿は桿皮2~3重に巻いた筒状のものであったことも判明した。

鉢斧について：小型で略長方形の折返して袋部を造る鍛造品であり片手使用が想定される。

鉢とその付着布片について：鉢は曲り刃薄造りで、着柄も直角に近く新しい様式である。

そして刃裏に3分人（女）の着衣が銷で付着していた。繊維は苧で太さ1mmほどの緩い撚り糸とし、1cm当たり8×7.5本の平織りの布であることが判った。

被葬者の配置について：被葬者は子供（性別不明）4人と成人女性1人、男性3人である。

子供3人は集骨されているが、成人はすべて仰臥伸展位で平行に置かれ、しかも頭位が女性は奥側に、男性は入口側とする互位の置き方である。

このように男女互位で平行又は重ね合せや、性別によって定位とする横穴墓・箱式石棺の小古墳は、奥出雲地方で事例を増しつつある。これを一覧表示する。

町名	道跡名	被葬者数	頭位		配置	備考文献
			人口	奥		
横 穴 墓	こふけ横穴	男1女1	男1	女1	互位平行	註3
	上分中山横穴群1号穴	男3	男3	—	平行	註4
	川子原横穴	男1女1	女1	男1	互位平行	註5
横 田	宮ノ崎横穴 (瀧ノ谷戻横穴)	女2	女2		平行	註6 2人ともインカ骨あり
	(小池・小池奥横穴群)	石棺内不明3+集骨 16人に多數あり	不明2	不明1	重ね合せ	註7
			?	?	平行あり	註8

	天狗松 6号穴	不明 3以上(集骨あり)	不明 1	(集骨)		註9
三刀屋	東下谷 6号穴	大人男 2女 2乳児 1	女 2	男 2	互位重ね合せ 2組	註10
吉 墓	横田 大嵐川向 1号墳	女 2	徳女 2	徳一	重ね合せ	註11
加 茂	川子谷 B 1号墳	男 1女 1	徳女 1	徳男 1	*	註12

このように男女を互位とした平行又は重ね合せの配置は、古代中国に起原する陰陽説によるものとする見解<sup>註13</sup>もあり、雲南地方の横穴や古墳や箱式石棺内において多く見られるところである。玄室入口側を男性の頭位とする本例と同じ事例は、古代三處郷であった隣接の仁多町亀嵩地区のこふけ横穴と上分中山横穴のみであり、他の郷に属する仁多町川子原横穴や横田町・他の地点では男女の位置関係が逆である。これは葬送様式の地域差として、今後さらに検討を要する課題であろう。

以上述べたように、この横穴は人骨や副葬品特に鉄器の保存が良く、追葬順序や集骨手法、鉄器の着装や付着布片から多くの知見が得られた。また男女その頭位を互い違いとする墓制の地域性も示唆するものであった。

この横穴が営まれた6世紀後半～7世紀初頭は、時あたかも当地での鉄生産開始とみられるときでもあり、乏しい副葬品中で目立つ鉄器類は、その产地探究も含めてさらに検討すべき事項として残された課題であろう。

#### 註1 出雲國風土記

- 2 国考古学辞典・正倉院展図録、などによる。
- 3 杉原 清一：「こふけ横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書第XⅡ集』 1992
- 4 蓮岡法暉氏の教示による。
- 5 杉原 清一：「川子原横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書第XⅢ集』 1991
- 6 タイ：「宮ノ崎横穴」 横田町教育委員会 1994
- 7 未報告
- 8 \*
- 9 吾郷 和宏：『町内分布調査報告』 横田町教育委員会 1992
- 10 杉原 清一：「東下谷横穴群」 三刀屋町教育委員会 1984
- 11 タイ：「大嵐川向古墳群」 横田町教育委員会 1993
- 12 タイ：「川子谷 B<sub>1</sub>号墳」 加茂町教育委員会 1988
- 13 勝部 昭：「青銅器の埋納法—荒神谷青銅器の互い違い埋納をめぐって—」 『古来の日本と渡來の文化』 上田編 学生社 1997
- 14 鉄器類に関しては主に次の文献を参考にした。
- 新納 泉：「武器」『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣 1991
- 古瀬 清秀：「農工具」『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣 \*
- 広井 雄一：「刀剣のみかた」 第一法規 1975
- 村井 嘉雄：「日本上代の武器武具」『特別展・日本の武器武具』 東京国立博物館 1976
- 加鳥 進：「刀剣」「刀剣外装」『特別展・日本の武器武具』
- 石井 昌国：「古代刀の変遷」「古代刀と鉄の科学」 雄山閣 1995

## 付編 I

### 広瀬町西北田・足子谷横穴墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部第2解剖学教室

井上貴央 影岡優子 亀崎豊実 土井浩二

#### 1. はじめに

本稿は、広瀬町西北田の足子谷横穴墓から検出された人骨に関するものである。人骨の保存状況はおむね良好で、被埋葬者の年齢性別などについて所見を得ることができた。他の地域の古人骨との人類学的な形態の比較は、現在検討中であるが、これまでのところ明らかになった埋葬人骨の所見について報告する。

#### 2. 人骨の検出状況の概略と人骨の呼称

交連状態を保った人骨は羨道から見て玄室の右側から3体、左側から2体検出された。右側の3体のうち、2体は玄室奥壁に頭蓋を置き入口方向に足を向けて伸展仰臥位で埋葬されていた。このうち、玄室右壁寄りの人骨を1号人骨、中央寄りの人骨を3号人骨とする。残りの1体は玄室入口に頭を置き奥壁方向に足を伸ばして伸展仰臥位で埋葬されていた人骨で、これを2号人骨とする。

玄室の左側からは、交連状態を保ち、伸展仰臥位で埋葬されていた人骨が2体検出された。いずれも入口に頭部を置き、足を奥壁に伸ばした人骨であり、羨道からみて左壁寄りの人骨を7号人骨、中央寄りの人骨を8号人骨とする。8号人骨は7号人骨よりも玄室人口寄りに置かれており、下肢は7号人骨を避けるように、下肢をやや中央のほうに振った状態で検出されている。

玄室の奥壁の左側からは、顔面を玄室入口に向けた状態の2個の頭蓋が並んで検出されている。このうち、中央寄りの人骨を4号人骨、左寄りの人骨を5号人骨とする。5号人骨の前方には頭蓋骨が検出されている。この人骨を6号人骨とする。これらの4~6号人骨は一部は交連状態を保っているが、大部分は無秩序に検出されている。

#### 3. 検出人骨の記載

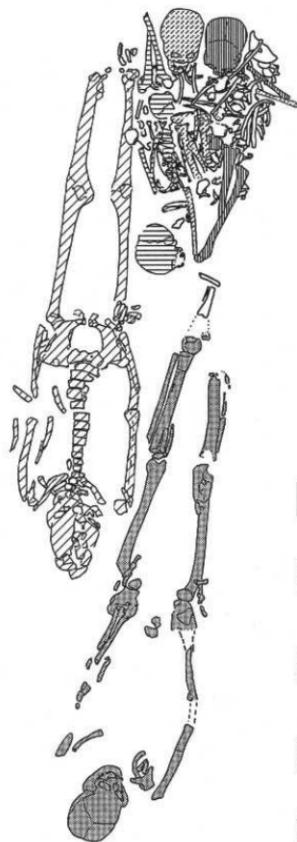
##### 1) 1号人骨

頭部を右奥壁に置き、足を入口方向に向け伸展仰臥位で埋葬されていたと考えられる人骨である。上顎と下顎は咬合状態にあり、下顎底は床面に接している。

頭蓋は左側頭部を欠くが、ほかはほぼ完存している。

頭蓋骨の三主径は頭蓋最大長が178mm、バジオン・ブレグマ高が130mmで、頭蓋最大幅は

(奥壁)



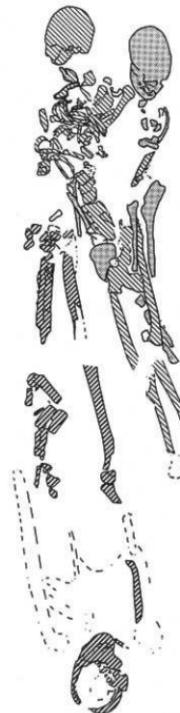
4号人骨

5号人骨

6号人骨

7号人骨

8号人骨



1号人骨

2号人骨

3号人骨

欠損のため測定できない。頭蓋長高示数は73.0となり、長高示数からみると頭型は中頭mesokranである。

顔面頭蓋は右の頬骨弓と左側の大部分を欠く。前頭部の膨隆は著明で、眉弓・眉間の突出は少なく、乳様突起も小さい。また、項面のレリーフは弱い。三主縫合は、内板・外板ともに未閉鎖である。蝶形骨と後頭骨の間もまだ結合していない。口蓋縫合をみると、正中口蓋縫合、切歯縫合ならびに横口蓋縫合のいずれも未閉鎖である。歯牙は、上顎では右第2乳臼歯を伴っている。第1大臼歯は完全に萌出しているが、第2大臼歯はまだ完全に萌出を完了していない。下顎の歯牙はすべてそろっているが、下顎骨の一部が破損していて、遊離歯の状態で検出されたものが多い。下顎は第2乳臼歯を伴っている。一部の歯牙の歯冠にはエナメル質減形成が認められる。中切歯と側切歯の歯根は全長がほぼ形成されており、犬歯と第1小臼歯の歯根は2/3以下まで形成されている。咬耗度はMartinの0~1度である。

M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>		
M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	
M <sub>3</sub>												M <sub>3</sub>		

四肢骨では、左尺骨片、左橈骨片、左右の大腿骨片、左右の脛骨片が検出されている。寛骨は3号人骨の下層から検出されている。本人骨の四肢骨や骨盤は交通状態はないが、寛骨や尺骨の位置は、1号人骨が伸展位で埋葬されたと考えたときの寛骨の位置にほぼ相当する。

本人骨の年齢は歯牙の萌出状況から判断して、小児期後半（10歳頃）のものと推測される。小児骨のため性別は判断できない。

## 2) 2号人骨

頭部を玄室人口に置き、足を奥壁に向けて伸展位仰臥位で埋葬されていたと考えられる人骨である。骨の保存状態は、頭部の一部を除いてきわめて悪く、取り上げに耐える骨も少なかった。頭蓋は、左右側頭骨、後頭骨、蝶形骨および上顎の一部が残存しているが、顔面頭蓋から頭頂部を欠いている。下顎は上顎と咬合状態で検出されている。乳様突起はよく発達している。外後頭隆起はやや発達しており、項面のレリーフも粗造である。三主縫合は人字縫合の一部のみが残存しているが、内板・外板とともに歴密閉鎖をきたしている。

口蓋縫合は、切歯縫合、横口蓋縫合外側1/2および正中口蓋縫合後部は閉鎖している。下顎骨では、左右中切歯、犬歯および左第1小臼歯は脱落しており、そのほかの歯槽骨は吸

収閉鎖をきたしている。脱落した歯牙は検出されていない。

閉 閉 閉 脱 脱 脱 | 脱 説 脱 脱 脱 開 閉

椎骨では第1～第7頸椎がほぼ交連状態を保って検出されている。

四肢骨は風化が著しく元の状態を保っていないものが多い。上肢骨では右上腕骨の一部が検出されているのみである。下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨が検出されているが、風化が進み細片化しているものが多い。大腿骨は頑丈で粗線もよく発達している。右寛骨の寛骨臼の部分が右大腿骨頭と交連状態で検出されており、両者は元位置を保っている。足根骨では左距骨と左右の踵骨が検出されているが、これらの骨は脛骨遠位に位置し、ほぼ元位置を保っているものと考えられる。

以上の所見から、本人骨は熟年後半の男性のものと推測される。右大腿骨の最大長は取り上げるときに計測したところ、43.3cmであった。Pearson式で身長推定を行うと約162.7cmと算定された。

### 3) 3号人骨

頭を奥壁に置き、足を入口に向けて伸展仰臥位で埋葬されていた人骨である。本人骨は1号人骨とほぼ平行に置かれていたようである。

頭蓋骨は、前頭骨右側と右側頭頂骨を欠くが、ほかはほぼ完形で、多くの計測値が得られた。頭蓋骨の三主径は頭蓋最大長が171mm、頭蓋最大幅が134mm、バジオン・ブレグマ高が128mmで、頭蓋長幅示数は78.4、頭蓋長高示数は74.9、頭蓋幅高示数は95.5となり、頭型はmeso-、meso-、metriokran（中・中・中頭）に属している。顔面頭蓋の幅径、高径についてみると、頬骨弓幅、中顎幅はそれぞれ125mm、99mmで、上顎高は65mmである。従って、コルマン及びウィルヒョウの上顎示数はそれぞれ、52.0、65.7であり、messen（中上顎）、chamaeprosop（低顎）を示している。右眼窩は一部に破損があって計測できないが、左の眼窩示数は92.3を示し、hypsknoch（高眼窩）に属している。鼻示数は52.9でchamaerrhin（広鼻）に属している。

前頭部の膨隆は著明であり、眉弓・眉間の突出は認められない。乳様突起の発達は軽度で、外後頭隆起は発達していない。顔面のレリーフは弱く、女性骨であると推測できる。三主縫合は冠状縫合の一部を欠くが、大部分の縫合は残存している。これらの縫合は、内板・外板ともに癒合閉鎖をきたしている。口蓋の縫合をみると、切歯縫合は消失しており、横口蓋縫合の外側部も癒合閉鎖をきたしている。正中口蓋縫合の口蓋骨部は検出されていない。

上顎では、右中切歯、右側切歯、左右犬歯および左第1小白歯は脱落しており、右第1、第2小白歯および左第1、第2大臼歯に相当する部分の歯槽は吸收閉鎖をきたしている。本頭蓋の下顎は、頭蓋のすぐ近傍から検出されており、ほぼ元位置を保っていたものと考えられる。下顎の歯槽縁の退縮は著しく、吸收閉鎖をきたしている部分もある。左下顎第1小白歯の近心面と第1大臼歯の近心面には3度のカリエスが認められる。歯牙の咬耗は著明で、Martinの2~3度である。この顎骨に見られた歯槽の退縮は歯槽膜漏によるものと考えられる。歯式は以下の通りである。

閉	閉	閉	閉	脱	脱	脱	閉	閉	閉	閉	閉
閉 M <sub>1</sub>	閉 P <sub>2</sub>	閉 P <sub>1</sub>	闭 C	脱 脱	脱 I <sub>2</sub>	闭 C	脱 P <sub>1</sub>	脱 M <sub>1</sub>	闭		

上肢帶の骨では左右の肩甲骨と左鎖骨の肩峰端が検出されている。脊柱の骨では胸椎の一部と腰椎が検出されている。骨盤の骨では左寛骨の一部と仙骨が検出されている。寛骨の大坐骨切痕は広く、女性骨をうかがわせる。

四肢骨は風化が著しく元の状態を保っていないものが多い。上肢骨では右上腕骨の一部、完形の左上腕骨、左尺骨の一部が検出されている。下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨片が検出されている。上腕骨は非常に華奢であるが、大腿骨は比較的頑丈で粗線の発達も著しい。

本人骨は老年後半~老年の女性のものと思われる。左上腕骨の最大長は27.7cmであり、Pearson式で身長推定を行うと147.8cmと算定された。

#### 4) 4号人骨

頭部を奥壁に置いた人骨である。四肢骨は風化が著しく、元の状態を保っていないものが多いため検討が困難であった。当初は頭を奥壁に置き、足を玄室入口に向けて埋葬されて、集骨によって骨が散布した状態で検出されたものと考えられた。しかし、大腿骨の近位端は左右ともに玄室入口の方にある。この状態は大腿骨を意図的に逆においたと考えなければ説明できず、当初の埋葬肢位を見直さざるを得なくなつた。詳細は埋葬様式の考察の項で詳述する。

本人骨の上顎と下顎は咬合状態にあり、下顎底は床面にある。頭蓋は後頭骨の大部分を欠いているが、ほかはほぼ完存している。破損のため、頭型は計測し得ないが、顔面頭蓋については多くの計測値を得ることができた。顔面頭蓋の幅径、高径についてみると、頬骨弓幅、中顎幅はそれぞれ125mm、102mmで、上顎高は57mmである。従って、コルマンおよびウィルヒュウの上顎示数はそれぞれ、45.6、55.9であり、eurien(広上顎)、hyperchamaeoprosop(過低顎)を示している。眼窩示数は右が91.4、左が88.6を示し、右がhypsknoch(高眼窩)、

左がmesoknoch（中眼窓）に属している。鼻示数は58.1でhyperchamaerrhin（過広鼻）に属している。

乳様突起は、検出されていない。眉弓・眉間の突出は著明ではなく、前頭部の膨隆は著明である。三主縫合は、内板・外板とともに未閉鎖である。口蓋縫合では、切歯縫合の1/2ならびに横口蓋縫合の外側部1/3は閉鎖しており、正中口蓋縫合は一部癒合閉鎖している。下顎歯は下顎第3大臼歯以外はすべて萌出している。下顎第1小白歯、第2小白歯および第2大臼歯の根尖は未閉鎖である。咬耗度はMartin 0～1度であり、右第1大臼歯にカリエスが認められる。歯式は以下の通りである。

M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	脱	脱	脱	I <sub>2</sub>	脱	脱	脱	脱	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>
M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub> 脱
M <sub>2</sub>						M <sub>2</sub>					

頭蓋骨以外の骨は集積状にまとめられた骨のなかから検出されている。上肢骨では左右の上腕骨、左橈骨、左右の尺骨が、下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨が検出されている。左右の大腿骨はほぼ平行に並んでおり、元位置をとどめているのではないかと考えられた。そのほかの骨は、集骨に伴って大幅に動かされている。

本人骨は歯牙の所見から小児期後半（13歳程度）のものと推測される。小児骨のため性別は判断できない。

## 5) 5号人骨

頭蓋骨は4号人骨と並んで検出されている。5号人骨と同様、四肢骨の配列は大幅に乱れている。

本人骨の上顎と下顎は咬合状態にあり、下顎底は床面にある。頭蓋は後頭骨を欠くが、ほかはほぼ完形である。破損のため、頭型は計測し得ないが、顔面頭蓋については多くの計測値を得ることができた。顔面頭蓋の幅径、高径についてみると、頬骨弓幅、中顎幅はそれぞれ115mm、90mmで、上顎高は55mmである。従って、コルマン及びウィルヒョウの上顎示数はそれぞれ、47.8、61.1であり、eurien（広上顎）、hyperchamaeprosop（過低顎）を示している。眼窓示数は右が97.0、左が97.0を示し、どちらもhypsknoch（高眼窓）に属している。鼻示数は58.5でhyperchamaerrhin（過広鼻）に属している。

前頭部の膨隆は著明であり、眉弓・眉間の突出は認められない。乳様突起の発達は軽度である。三主縫合は、冠状縫合と矢状縫合の部分が検出されており、内板・外板とともに未閉鎖である。口蓋縫合は切歯縫合、横口蓋縫合ならびに正中口蓋縫合はいずれも癒合閉鎖をきたしていない。上顎では第2大臼歯は未萌出であり、中切歯・側切歯の歯根は未完成

である。上顎骨には乳犬歯、第1・第2乳臼歯および第1大臼歯が釘植している。下顎では中切歯、側切歯の歯根は未完成で、乳切歯、第1・第2乳臼歯、ならびに第1大臼歯が釘植している。歯式は以下の通りである。

M <sub>1</sub>	脱					I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	C	m <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>
M <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	m <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	m <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>
M <sub>2</sub>												M <sub>2</sub>

頭蓋骨以外の骨は集積状にまとめられた骨のなかから検出されている。上肢骨では右上腕骨、左右の桡骨、左右の尺骨が、下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨が検出されている。このうち、右上腕骨、左右の大腿骨は遠位端が玄室奥壁に位置して検出されている。

本人骨は歯牙の萌出状況から判断して、小児期（10歳程度）のものと推測される。小児骨のため性別は判断できない。

## 6) 6号人骨

頭部を入口方向に向かって、足を奥壁に置き、埋葬されていた人骨である。胸椎と腰椎の一部は交連状態を保った状態で検出されており、大まかに骨配列をみると、頭蓋骨、胸郭を構成する骨、上肢骨、椎骨、骨盤、大腿骨には大きな乱れは認められない。本人骨は頭部から大腿骨にかけてはほぼ交連状態を保っているが、大腿骨遠位端が玄室奥壁に接しており、それ以下の脛骨は4号人骨と5号人骨の集積状の四肢骨のなかから検出されている。この点は後に本人骨の埋葬様式を考える上で、重要なポイントになる。

本人骨の下顎は、頬蓋よりやや真壁にあり、下顎底が床面に接している。頭蓋骨は右側頭部を下にして下顎骨の近傍から検出されており、顎骨は咬合関係はない。頭蓋は、顔面頭蓋の右側、前頭骨右側、右側頭骨の一部ならびに右頭頂骨の一部を欠いているが、ほかはほぼ完形である。頭蓋骨の三主径で頭蓋最大長は破損のため計測できなかったが、頭蓋最大幅は127mm、バジオン・ブレグマ高が126mmで、頭蓋幅高示数は99.2で、頭型はakrokran（狭頭）に属している。顔面頭蓋は破損が大きく計測し得なかった。

前頭部の膨隆は著しく、眉弓・眉間は突出していない。乳様突起は小さく、項面のレリーフは弱い。三主縫合を見ると、人字縫合の内板は一部閉鎖しているが、外板は未閉鎖である。骨口蓋縫合では、切歯縫合、正中縫合および横口蓋縫合いずれも癒合閉鎖をきたしていない。上顎では、左第1大臼歯が釘植し、第2大臼歯は未萌出であり、左第2乳臼歯は脱落しつつある。第2小臼歯の根尖は未完成である。下顎には、左中切歯、左右側切歯、左右第2小臼歯および左右第1大臼歯が釘植しているが、中切歯および左右側切歯の根尖

に未完成部分を残している。歯式は以下の通りである。

M <sub>3</sub>	m <sub>2</sub>	脱	脱	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	脱	脱	m <sub>2</sub>	M <sub>2</sub>
----------------	----------------	---	---	----------------	----------------	----------------	----------------	---	---	----------------	----------------

M<sub>2</sub>

骨盤の骨では、左右の腸骨、左坐骨が、上肢骨では左上腕骨、左右の橈骨、右尺骨が、下肢骨では左右の大腿骨と左右の脛骨が検出されている。骨端部で残存している骨を見ると、橈骨と尺骨の遠位端が未骨化である。

歯牙萌出の所見から、この頭蓋は小児期（9歳程度）のものと推測される。小児骨のため性別は判断できない。

## 7) 7号人骨

頭部を玄室入口に置き、足を奥壁に向けて伸展仰臥位で埋葬されていたと考えられる人骨である。頭蓋骨の顔面頭蓋はほぼ完形であったが、脳頭蓋は破損が大きかった。幸いなことに脳頭蓋骨を構成する骨がほぼ揃っており、接合作業によってほぼ完形の頭蓋骨に復すことができた。

頭蓋骨の三主径は頭蓋最大長が188mm、頭蓋最大幅が138mm、バジオン・ブレグマ高が130mmで、頭蓋長幅示数は73.4、頭蓋長高示数は69.1、頭蓋幅高示数は94.2となり、頭型はdolio-、chamae-、metriokran（長・低・中頭）に属している。顔面頭蓋の幅径、高径についてみると、頬骨弓幅、中顎幅はそれぞれ136mm、115mmで、上顎高は74mmである。従って、コルマン及びウィルヒョウの上顎示数はそれぞれ、54.4、64.3であり、messen（中上顎）、hyperchamaeprosop（過低顎）を示している。眼窩示数は左右ともに94.3で、どちらもhypsiknoch（高眼窩）に属している。鼻示数は51.7でchamaerrhin（広鼻）に属している。

前頭部はなだらかに頭頂部に続いており、前頭部の膨隆は著明ではない。眉弓・眉間は軽度突出している。乳様突起は検出されていない。顔面頭蓋の頬骨部は左右によく張り出しており、眼窩間幅は広い。

三主縫合は左冠状縫合の部分のみが検出されており、内板は癒合閉鎖をきたしているが、外板は未癒合の部分も残っている。骨口蓋縫合では、切歯縫合はほぼ消失し、横口蓋縫合の外側部は痕跡が認められるのみで、正中口蓋縫合の口蓋骨部後2/3は消失している。上顎と下顎は咬合状態にある。上顎の歯牙は左第3大臼歯を除き、すべて釘植しており、咬耗度はMartinの2度である。右第3大臼歯部の歯槽骨は吸収閉鎖している。右中切歯には異常咬耗が認められ、左右第1大臼歯にカリエスが認められる。下顎歯はすべて釘植しており、咬耗度はMartinの1~2度である。歯式は以下の通りである。

閉	M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	脱	I <sub>2</sub>	脱	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	脱
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>

左右の寛骨と仙骨が検出されており、大坐骨切痕は狭く、男性骨と推測される。

四肢骨は上肢・下肢骨ともにほぼ元位置を保っており、ほぼすべての骨がそろっている。足根骨も脛骨遠位端に統いて検出されており、本人骨の骨は動かされていないものと判断できる。

本人骨は総合的に骨の所見を判断して、壮年男性のものと考えられる。左右の大転骨の最大長はそれぞれ44.1cm、44.4cmである。これからPearson式で身長推定を行うと左大転骨からは164.2cm、右大転骨からは164.7cmとなる。したがって、本人骨の推定身長は約164.5cmとしておく。

## 8) 8号人骨

頭部を玄室入口部の壁に置き、足を奥壁に向けて伸展仰臥位で埋葬されていたと考えられる人骨である。上顎と下顎は咬合状態にあり、下顎底は床面にある。頭蓋は後頭骨の大部分と左右側頭骨の一部を欠いているが、ほかはほぼ完形である。脳頭蓋は計測点を欠くため、得られた計測値は少ない。上顎部の形態を示す計測値もほとんど得られなかつたが、眼窓と鼻部については計測値が得られた。眼窓示数は右が87.5、左が89.7を示し、右側はmesoknoch(中眼窓)、左側はhypsknoch(高眼窓)に属している。鼻示数は51.1でchamaerrhin(広鼻)に属している。

前頭部はなだらかに頭頂部につながり、眉間・眉弓の突出は中等度である。乳様突起は検出されていない。三主縫合は人字縫合の一部を欠くほかは、ほぼすべての部分が検出されている。内板は癒合閉鎖をきたしているが、外板は冠状縫合の一部を除き癒合閉鎖をきたしていない。骨口蓋縫合では切歯縫合外側部が消失し、横口蓋縫合外側部は痕跡を残すのみで、正中口蓋縫合の口蓋骨部後2/3は縫合が消失しつつある。上顎には8本の歯牙が釘植しており、咬耗度はMartinの3度である。左右第1大臼歯にカリエスが認められる。下顎には第3大臼歯を含めすべての歯牙が釘植している。咬耗度はMartin 2~3度であり、第1大臼歯にカリエスが認められる。歯式は以下の通りである。

脱	脱	M <sub>3</sub>	脱	脱	脱	I <sub>3</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	脱	P <sub>1</sub>	脱	M <sub>3</sub>	脱	M <sub>2</sub>
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>

四肢骨は風化のため元の状態を保っていないものも多い。上肢骨では左右上腕骨、左右桡骨、左右尺骨の一部が検出されているが、細片化しているものが多い。下肢骨では左右の人腿骨、左右の脛骨、左右の腓骨が検出されている。四肢骨は頑丈で大腿骨では粗線の

発達が良好である。

以上より本人骨は壮年男性のものと推測される。左右の大腿骨の最大長は取り上げる時に計測したところ、ともに43.0cmであった。これからPearson式で身長推定を行うと約162.1cmと算定された。取り上げた骨を欠損部を考慮して計測した左大腿骨の最大長は41.9cmで、取り上げ時の値と約1cm異なっている。これからPearson式で身長推定を行うと約160.1cmと算定された。したがって、本人骨の推定身長は160~162cmとしておきたい。

### 3. 埋葬順序と埋葬様式について

#### 1) 玄室右側の人骨（1～3号人骨）

骨の重なり具合から埋葬順位を考える。2号人骨は1号人骨とも3号人骨とも骨の重なりが認められず、骨のみから新旧関係を論じることは難しい。3号人骨は1号人骨の上に重なっており、3号人骨の下層から1号人骨の骨盤や下肢骨が検出されていることから、3号人骨は1号人骨より新しいことは明らかである。

3号人骨と2号人骨の頭位は逆であるが、3号人骨の下肢は2号人骨の下肢を避けるようにして玄室右壁にやや振るように置かれている。3号人骨は1号人骨の骨盤や下肢の上にのっていることから判断すると、1号人骨が白骨化した状況で、その上に3号人骨を安置し、この時はまだ2号人骨は白骨化していないかったため、これを避けるように3号人骨の下肢を右壁側に振ったと考えるのが妥当である。このように考えると、埋葬順位は1号人骨→2号人骨→3号人骨の順になる。

1～3号人骨はいずれも伸展仰臥位で埋葬されている。

#### 2) 玄室右側の人骨（4～8号人骨）

4～5号人骨は玄室の左奥隅に集骨状態で検出されており、6号人骨は大部分の骨が交通状態を保っているものの、脛骨が4～5号人骨の中から検出されていることから考えて、何らかの人为的な行為を受けていることは明らかである。

7～8号人骨は頭を入口に置き、伸展仰臥位で埋葬されていたが、人骨の配列には乱れは認められない。8号人骨の下肢は4～6号人骨の集積骨を避けるようにして下肢を玄室中央に振って検出されているため、8号人骨が最後の埋葬者であったと考えられる。

玄室右側の人骨の埋葬順位と埋葬形態を考える上で、最も重要なポイントになるのが4～6号人骨である。これらの骨はいずれも子供の骨であるが、6号人骨は下腿骨を除いてほぼ交通状態にある。4、5号人骨は頭蓋は並んでいるように見えるが、四肢骨は集積状態にある。6号人骨が交通状態を保っていることから判断すると、これらの骨の中では6号

人骨が最も新しいことになる。

4号人骨と5号人骨の頭蓋は後述するように人為的に配置されたものである。大部分の四肢骨は人為的にまとめられているように見受けられるが、4号人骨の左右の大腿骨、5号人骨の左右の大腿骨と右上腕骨の骨端の配列状況を見ると、いずれも遠位端を玄室奥壁に向けて検出されている。これらの大腿骨はほぼ元位置をとどめており、頭蓋骨や上肢骨、体幹骨などを後に集積し、頭蓋骨を玄室奥壁に置いたと考えたい。すなわち、4号人骨と5号人骨はもともと頭を玄室入口に置き、足を玄室奥壁に伸ばして伸展仰臥位で埋葬されていたものを、人為的な作業によって、頭部を奥壁に並べ、大部分の骨を集骨したと考えるのが妥当であると思われる。

この人為的な作業の契機となったのは骨配列からのみ考えると、8号人骨の埋葬である。8号人骨を埋葬するため、7号人骨と平行して埋葬されていた4～6号人骨を奥壁側にずらす必要が生じたと考えるのが妥当であろう。

4号人骨と5号人骨は骨顔貌が非常によく似ている。おそらく兄弟か姉妹であったに違いない。骨の移動に伴って、この近親関係にあった4号と5号の人骨の頭蓋骨を並べて置いたのは、単に偶然ではなく、このような意味があつてのことであろう。

次に4号人骨と5号人骨の新旧関係を論じる。両者の埋葬時期は骨の検出状況からは判断が難しいと思われたが、あえて判断すると、4号人骨の方が新しいのではないかと思われる。5号人骨の骨端と骨幹はバラバラに検出されており、これは骨の移動時に無秩序な骨配列となってしまったものである。しかし、5号人骨の左大腿骨遠位端の近くからは左脛骨の近位骨端が検出されており、5号人骨は骨の移動時には少ないながらもある程度、靭帯で連結した状態であったと考えられるからである。骨の移動は8号人骨の埋葬に伴うものであると考えられ、4号人骨も5号人骨も同時期に骨を動かしたものとすれば、靭帯部分が残っていた5号人骨が4号人骨よりも新しい埋葬であると判断できよう。

8号人骨を安置するため、6号人骨も奥壁に移動させなければならなかったが、このときはまだ、6号人骨の靭帯等の軟部組織が残っていたものと思われる。6号人骨を完全に奥壁に寄せるることは不可能であったので、外れかけるぐらいたるに腐化していた膝関節部分で脛骨を外したものと考えられる。

以上の骨の検出状況のみから考えると、玄室右側の人骨の埋葬順序は7号人骨→5号人骨→4号人骨→6号人骨→8号人骨となる。しかし、7号人骨が左側の人骨群で最初の埋葬者であったとの確かな証拠はない。意識的に子供の遺骸を玄室中央寄りに安置していたとして、その後7号人骨を側壁寄りに安置したとも考えられる。

#### 4. おわりに

検出された人骨は、総数8体であった。それぞれの年齢性別の特徴をまとめると次のとおりである。

- 1号人骨：小児期後半（10歳程度）で、性別は不明。
- 2号人骨：熟年後半の男性で、身長は162.7cmと算定。
- 3号人骨：熟年後半～老年の女性で、身長は147.8cmと算定。
- 4号人骨：小児期後半（13歳程度）で、性別は不明。
- 5号人骨：小児期（10歳程度）で、性別は不明。
- 6号人骨：小児期（9歳程度）で、性別は不明。
- 7号人骨：壮年男性で、身長は約164.5cmと推定。
- 8号人骨：壮年男性で、身長は160～162cmと推定。

最後に、本横穴墓から検出された頭蓋骨の特異性について触れておく。大部分の下顎骨は下顎底が床面に接しており、頭蓋が下顎と咬合した状態で検出されたもののが多かった。このような咬合状態は伸展仰臥位で埋葬された人骨がそのまま白骨化したとすると、とりえない骨配列である。つまり、伸展仰臥位の場合は口部が上方を向き後頭部が床面と接することになるので、そのまま白骨化した場合は下顎底が床面に接し、咬合状態になることはあり得ない。白骨化してから下顎と上顎を咬合させて再び埋葬するという頭蓋骨に対する積極的な意識が読みとれる。なお、最後の埋葬者と考えられる8号人骨も頭蓋と下顎が咬合状態にあり、白骨化後も再葬の儀式が行われたことが示唆される。今後、このような埋葬様式について類例をさらに検討したいと考えている。

4号人骨と5号人骨は見た目にも似通った顔つきをしており、顔面頭蓋の計測上も両者は似た形質を有していることが明らかになった。兄弟あるいは姉妹である可能性が高いものと考えられる。歯冠計測法を用いた類似関係の検討は今回行わなかったが、将来の課題としている。

稿を終えるにあたり、本人骨の調査の機会を与えていただいた広瀬町教育委員会の各位、人骨の検出状況について御検討いただいた杉原清一氏に感謝申し上げる。

表1 頭蓋骨計測値

		1号人骨	2号人骨	3号人骨	4号人骨	5号人骨	6号人骨	7号人骨	8号人骨
骨番号		159	125	159	10	11	24	38	117
頭蓋	1 頭蓋最大長	178		171				188	
	8 頭蓋最大幅			134	135	135	127	138	139
	17 バジョン・ブレグマ高	130		128			126	130	
	8/1 頭蓋長幅示數			78.4				73.4	
	17/1 頭蓋長高示數	73.0		74.9				69.1	
	17/8 頭蓋幅高示數			95.5			99.2	94.2	
	9 最小前頭幅				90	86		97	92
	10 最大前頭幅				110	108		120	117
	5 頭蓋底長	97		100				108	
	11 両耳幅		130	123	120	112		127	
顎	12 最大後頭幅	101	106	103	112*		99		
	13 乳突幅		110*						
	7 大後頭孔長	26	32	34			36		
	16 大後頭孔幅	37	29	28			26		
	16/7 大後頭孔示數	142.3	90.6	82.4			72.2		
	23 頭蓋水平周			499*				532	
	24 橫弧長							304	
	25 正中矢状弧長	363		359					
	40 顎長			93				106	
	43 上顎幅				97	91		106	
顎面	45 頰骨弓幅			125*	125	115		136	
	46 中顎幅			99	102	90		115	
	48 上顎高			65	57	55		74	66
	48/45 上顎示數(K)			52.0*	45.6	47.8		54.4	
	48/46 上顎示數(V)			65.7	55.9	61.1		64.3	
	50 前眼窩間幅			18	18	17		28	18
	44 両眼窩幅				88	83		97	
	50/44 眼窩間示數				20.5	20.5		28.9	
	51 眼窩幅(右)				35	33		35	40
	眼窩幅(左)			39	35	33		35	39
頭蓋	52 眼窩高(右)				22	32		33	35
	眼窩高(左)			36	31	32		33	35
	52/51 眼窩示數(右)				91.4	97.0		94.3	87.5
	眼窩示數(左)			92.3	88.6	97.0		94.3	89.7
	54 鼻幅			27	25	24		30	24
	55 鼻高	45		51	43	41		58	47
	54/55 息示數			52.9	58.1	58.5		51.7	51.1
	57 鼻骨最小幅			6	7	7		8	6
	57(1) 鼻骨最大幅			15	17	17			
	60 上顎齒槽長				51	45		55	55
顎	61 上顎齒槽幅			57	61	58		70	64
	61/60 上顎齒槽示數				119.6	128.9		127.3	116.4

単位はmm、\*は推定値

表2 上肢骨計測値

		2号人骨 右	3号人骨 左	7号人骨 左	8号人骨 左
上腕骨	骨番号	130	154		
	1 上腕骨最大長		277		
	2 上腕骨全長		275		
	5 中央最大径		19		
	6 中央最小径		14		
	7 骨体最小周		56		
	7a 中央周		56		
	6/5 骨体断面示数		73.7		
	7/1 長厚示数		20.2		
	骨番号			55	109
桡骨	3 骨体最小周			45	41
	4 骨体横径			29	
	5 骨体矢状径			13	
	5/4 骨体断面示数			44.8	
	骨番号	162			
	11 骨体矢状径		10		
	12 骨体横径		12		
	11/12 骨体断面示数		83.3		
	骨番号				

単位はmm

表3 下肢骨計測値

		2号人骨 右	3号人骨 右	7号人骨 右	8号人骨 左
大腿骨	骨番号	132	164	166	63 62 119
	1 最大長			444	441 419*
	2 自然位全長		390	442	441 418
	6 骨体中央矢状稜	32*	27	25	31 31 29
	7 骨体中央横径	26*	26	26	27 27 27
	8 骨体中央周	92*	83	80	92 92 89
	9 骨体上横径		38		
	10 骨体上矢状稜		26		
	8/2 長厚示数			20.5 20.8	20.9 21.3
	6/7 骨体中央断面示数	123.1*	103.8	96.2 114.8	114.8 107.4
脛骨	10/9 上骨体断面示数			68.4	
	骨番号		172	73	72 123
	1a 脣骨最大長			367	
	1b 脣骨長			360	
	8 中央最大径			34	33
	8a 栄養孔位最大径		27	37	38
	9 中央横径			21	21
	9a 栄養孔位横径		20	23	23
	10 骨体周			85	85
	10a 栄養孔位周		75	96	97
腓骨	10b 最小周			77	77 81
	9/8 中央断面示数			61.8	63.6
	9a/8a 栄養孔位断面示数			62.2	60.5

単位はmm、\*は推定値



1 a



2 a



1 b



2 b



1 c

1 a : 頭蓋正面觀 (1 号人骨)

1 b : 頭蓋側面觀 (1 号人骨)

1 c : 頭蓋上面觀 (1 号人骨)

2 a : 頭蓋底面觀 (2 号人骨)

2 b : 下頷骨上面觀 (2 号人骨)



1 a



2 a



1 b



2 b



1 c

1 a : 頭蓋正面観 (3号人骨)

1 b : 頭蓋側面観 (3号人骨)

1 c : 頭蓋上面観 (3号人骨)

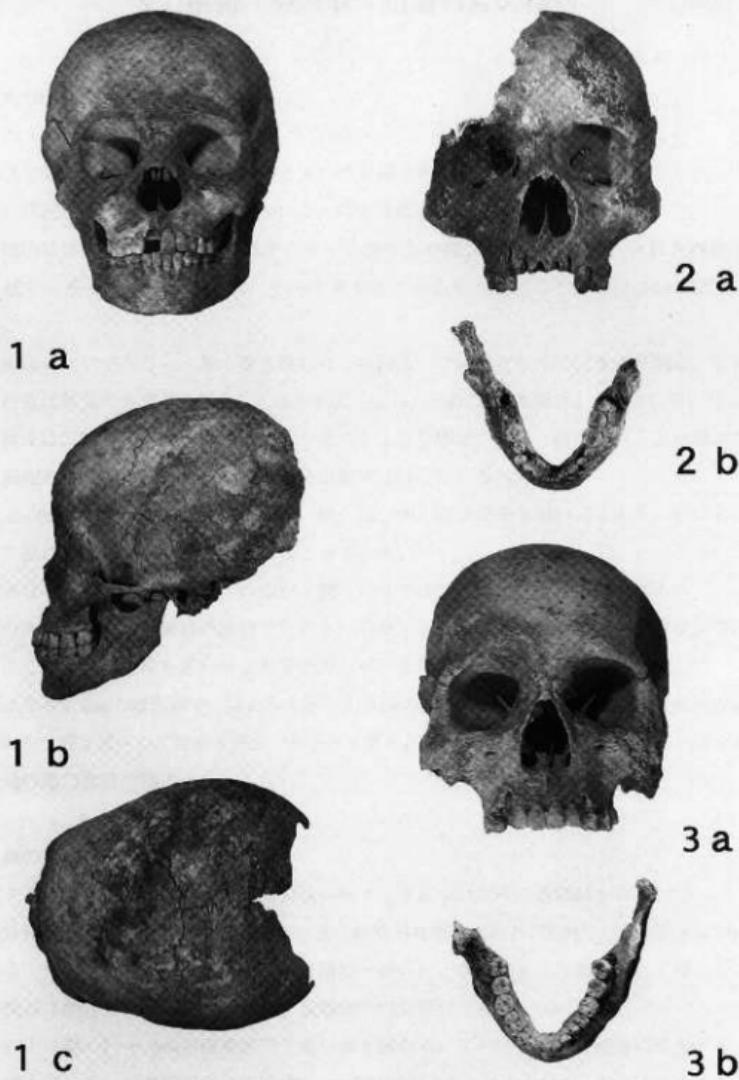


2 c

2 a : 頭蓋正面観 (4号人骨)

2 b : 頭蓋側面観 (4号人骨)

2 c : 頭蓋上面観 (4号人骨)



1a:頭蓋正面観(5号人骨)

1b:頭蓋側面観(5号人骨) 2a:頭蓋正面観(7号人骨) 3a:頭蓋正面観(8号人骨)

1c:頭蓋上面観(5号人骨) 2b:下顎骨上面観(7号人骨) 3b:下顎骨上面観(8号人骨)



## 付編Ⅱ

### 大刀柄拵・鐵茎卷・付着布片の検討

杉原 清一

#### A. 大刀柄拵について

この大刀の柄巻きは喰出し鐸の元から柄頭へと全面に巻いた「萬継」様のもので、柄頭部は欠失しているが、鞘尻と同様とすれば方頭であろう。

残存状況の良い柄巻きの材料について、以下形状を中心検討を試みる。

眼視的には太さ約1mmの縒り紐をぐるぐる巻きした様に見られる。これを拡大観察すると縒りにそって亀裂がみられ、その太さも必ずしも均一ではなく0.7~1.1mmの範囲である。

破断面についてみると、強く巻き締めたため紐はやや偏平となっているのが判る。この紐の材質は軟質の木質部を芯とし、厚さ0.07~0.1mmの薄皮状の被覆が1~2重に見られる。この薄皮は0.7~0.9mm幅の長い繊維列を並べたような形状であり、樹皮というより草木の茎の剥皮のようである。しかし繊維細胞の鑑定は行っていない。

以上の所見からこの柄巻きに用いた「紐」は、例え芭の皮を用い「こより」状に右に捻って紐状として用いたものとみることができる。

柄木はやや軟質の材を用いているが、割り造りではなく落込みのようである。

鞘の木質部について祇日の破面で見ると、平均9本/10mmの年輪密度で、春秋材が明瞭であることなど、桧材を思わせる木質であるが、これ以上の観察は行っていない。

鐸は厚さ6.0mmの喰出鐸で、鍔から上下とも6mmの喰み出しがある。鍔は鉄地で幅約22mmで、鞘の木質は見られず皮巻き部分であったと思われる。これに接して断面蒲鉾形、幅9mmの鉄地の鞘口金具に接する。

#### B. 鐵の茎巻きについて

鐵7本のうち茎部付近の保存状況の良いNo.3-3についてその着柄部をみる。

鐵は鎧被部下端に棘状のあるもので、茎は断面四角形と思われ、先尖りでその長さは34mmである。矢柄は中空の材で繊維束が並び蘆竹とみられ、着柄部を二ツ削りにして挿入し、その端部は削って太さを整えている。茎端部での矢柄材は直径6.5mm、肉厚1.2mmである。

この上に幅0.7~0.9mmの繊維束で三重に巻き締める。この時角度を各段毎に交叉するようになっている。この繊維束は直径約0.6mmの単繊維をまとめたもので、撚りは全くかかっていない。繊維の種類は鑑定していないが芭ではなかろうか。

さらに茎端付近にはこの上に黒色で樹脂様の厚さ0.10~0.15mmの塗付物が見られ、その

上に繕ぎ日の不明瞭な厚さ0.03mmほどの半透明質の被膜が被っている。これは樟皮の極く薄く剥がしたものであろう。

このように茎巻きの手法は、矢柄竹の先端を削って茎を挿入し、細糸で巣虫に巻き締めさらに松脂などの樹脂を塗って、樟皮などで巻き上げて外装したものとみられる。

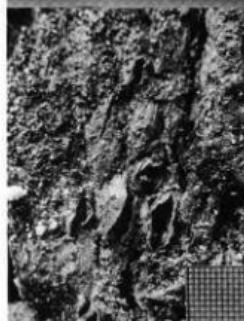
### C. 鉄鎌に付着した布片について

3号人骨の左膝蓋上に置かれていた鉄鎌の背面（膝蓋に接していた面）に布片が付着して残っていた。鉄錆で固着していたものである。これの材質鑑定は行っていないが、拡大・検鏡の形態による所見を記す。

布片は1cm当たり縫8本経7.5本の平織りで、糸の太さは幅で0.7~0.9mmである。この糸は弱い左縫りであり、刺落細片の検鏡ではその纖維の断面形は空洞となっているもののその形状が鉄錆によって固定されていて元の形状が判る。幅41~68 $\mu$ 、厚さ16~20 $\mu$ の偏平長円形で、中ほどがややつぶれ気味である。

既報の古墳時代布・糸類の植物質纖維断面に比較すると、幅広で偏平の著しいのは苧麻<sup>註1</sup>で、本例はその大きさもほぼ同程度であり、他種の断面形状と大きく異なることから、材質を苧麻と判定する。

註1 参考事例 三宅・松本：「1号墳出土遺物・鉄鎌」『出雲岡山古墳』 島根県教委 昭和62年など  
2 布日 順郎：『綿と布の考古学』 雄山閣 昭和63年



0 5 cm

(目盛 0.1mm)

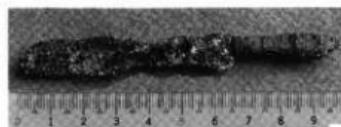
大刀の柄巻き



表面



断面



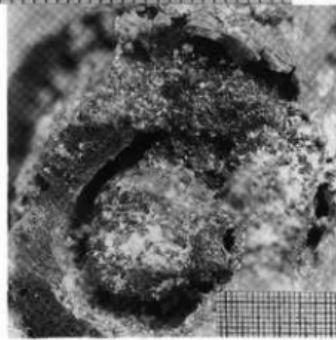
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9



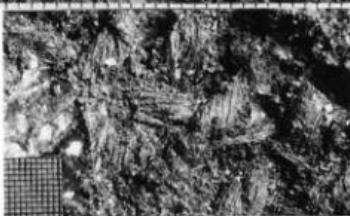
(目盛 mm)



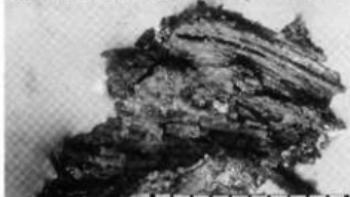
(目盛 mm)



鉄鎌の茎巻きと矢柄竹  
(茎端の破断面)  
(目盛 0.1mm)



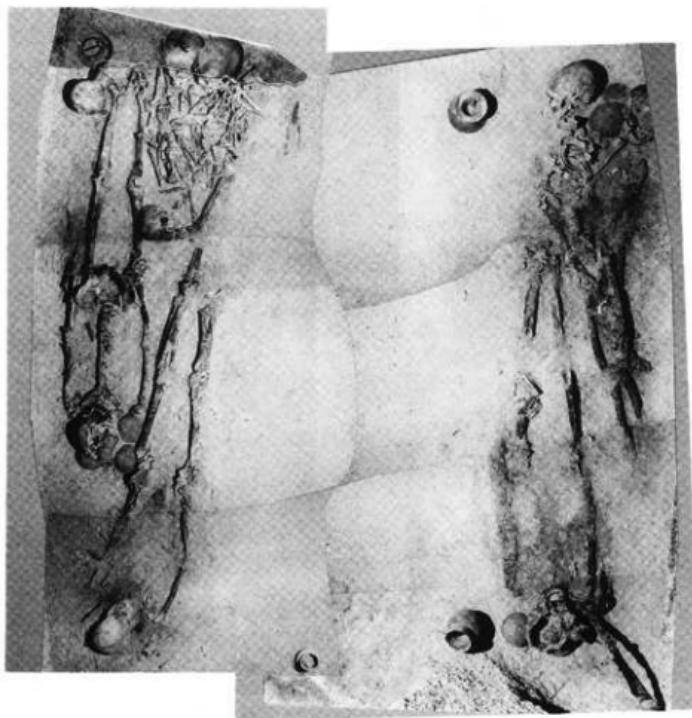
目盛  
(0.1mm)



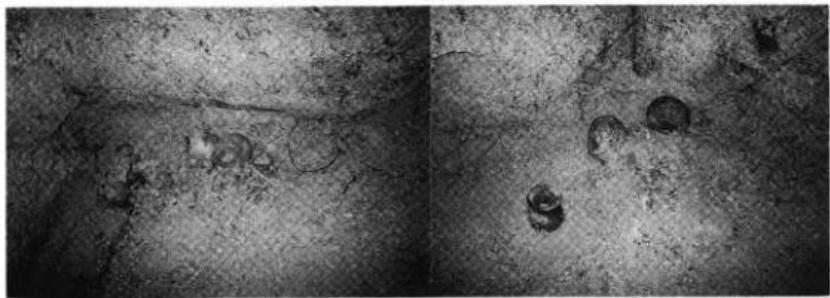
鉄鎌付着の布片・繊維  
(目盛 0.1mm)



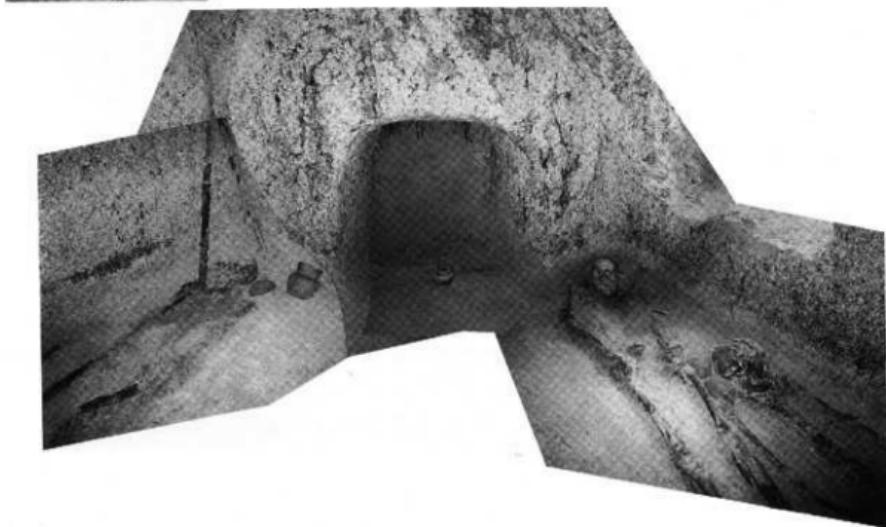
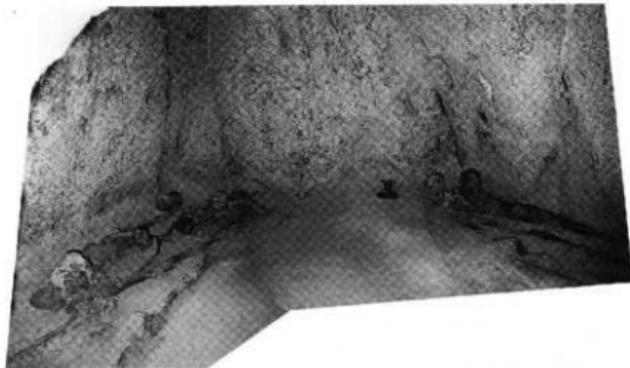
遠 景

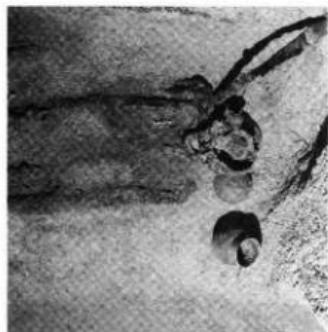
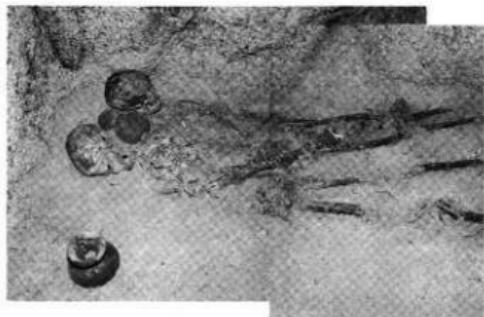


玄室内の状況



発見時の状況





被葬者と副葬品



22



19



10



21



20



14



17



11



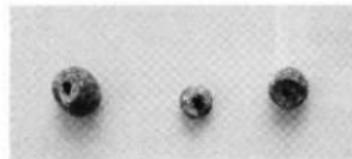
15



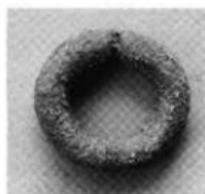
6



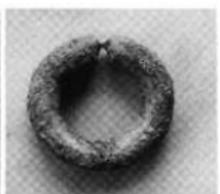
18



小玉

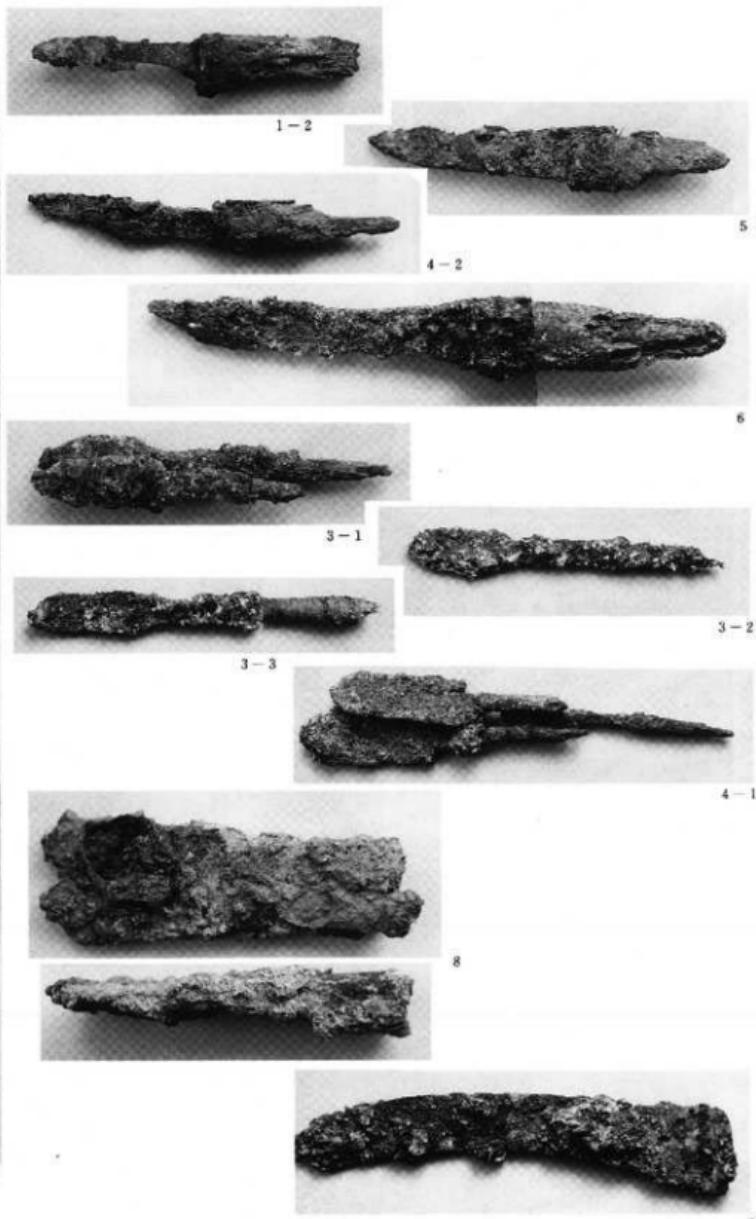


7-1

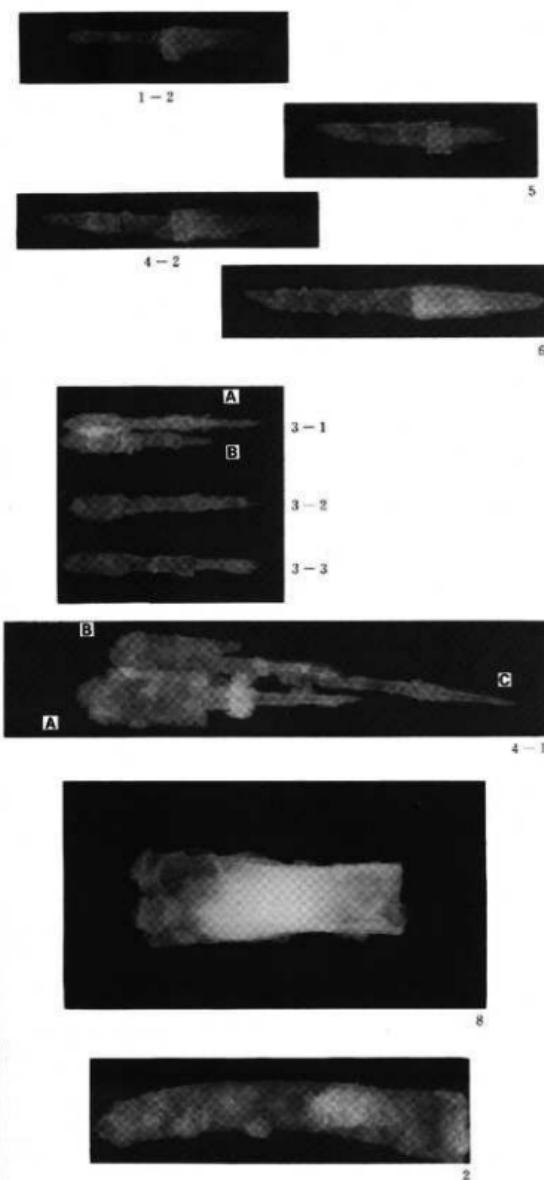


7-2

遺物 (1) (図5に同じ)



遺物 (2) (図6と同じ)



鉄器 X 線写真 (県埋文センター)

中国第二中幹線鉄塔建設  
区域内遺跡発掘調査報告書

## 足子谷横穴墓

1997年10月

発行 広瀬町教育委員会  
島根県邑智郡広瀬町広瀬703

印刷 (南)太陽半版  
島根県安来市安来町765-5